

大僧正本多日生著

# 総合的佛教觀

◆四六版 金壹圓五拾錢 送料八錢  
全一冊 金壹圓五拾錢 送料八錢

著者多年大藏經全部を精研し、曾て大藏經要義を撰述し、今復此著あり、各宗の真諦を斷破して大藏經に直進し、華嚴、阿含、方等、般若、法華、の五大部を講明し、善く佛教の眞面目を發揮し、其の総合的観題を示す、行文流暢何人も領解し得べし、佛教の書籍多しと雖も、未だ曾て此種の著書あらず、今や日本國民は其使命を自覺し、東洋の文明に歸らざるべからず、此時此著あり、此書讀まざるべからず。

發行所 統一編輯局

名古屋市東區田代町城山

電話東五四八七番  
振替名古屋一〇八一九番

大僧正本多日生著

# うるの奥山今日こえて

一部定價金貳拾錢 郵税金貳錢  
施本用特價拾部金壹圓貳拾錢(送料共)

いろは四十八文字、そこに如何の宗教を載し、そこに如何の哲學を含める、如來一代五十年の教化八萬四千の法門は、簡約せられて四十八文字に有り、東洋六千年の文化は簡縮せられていろは歌に存す。本書は宗教界の權威本多日生師によつて、眞の人間觀、眞の生死觀、眞の解脱、眞の信仰、眞の道德を講説せられたるもの、釋尊の教に依つて光あり力ある人生の行路を導きまんとする者は、必ず精讀せよ。

第十二版印刷發行

### 統一定價

一冊	金貳拾錢	送料五厘
半冊	金壹圓貳拾錢	送料共
一ヶ月	金貳圓貳拾錢	送料共
一年		事之金前

### 統一廣告料

表紙	金貳拾錢	前金
一頁	金拾五錢	前金
半頁	金九錢	前金
四分一頁	金五錢	前金
廣告		事之金

不許複製

大正十四年五月十七日印刷精本(第三百六十三號)  
大正十四年六月一日發行

編輯兼 國友日斌  
印刷所 鈴木日雄  
發行所 統一編輯局  
編輯所 統一編輯局

東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地  
名古屋市中區千種町字五反田五二番地  
東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地  
名古屋市中區田代町字城山七十七番地  
振替東京五一〇七一番  
電話東五一〇八一七番  
振替名古屋一〇八一九番

## 目次

佛教の卓越せる所以……………	本多日生
日蓮主義より見たる無量義經……………	井村日成
法華經要文講義……………	本多日東
罷睡録……………	山根日東
不閉庵涓滴……………	古田昂生
家族制度に就て……………	小林啓善
記事報導……………	

第廿九年七月號

# 統一

# 編輯局



一  
統

佛教の卓越せる所以

本 多 日 生

一、總論……二、各論……一、傳統的にあらす……二、形式的にあらす

佛教が世界のあらゆる宗教に比較して高等な位地を占めるものだといふことは、何人にも反対のない定論であらうと存じますが、その何人も反対しない定論を産むに至つた内容に就て、佛教の卓越して居る事柄を分解してお話致して見たいと思ふのであります。尤も佛教に反対をする人もあり、佛教を輕蔑する人もありますけれども、それは多くは感情の上から起ることであつて、宗教の研究に志すとか、或は宗教心の要求に依つて宗教を求めたといふ人に於て、決して佛教を侮蔑したり反対をする者はないので、佛教に反対する人は元來宗教の何たるかを考へないで、所謂無宗教、或は純科學思想に依つて高等なる哲學宗教を認めない人が、佛教に反対するのでありますから、それは思想の根本に相違があるのであります。それ故にそのやうな人は姑く別と致しまして、佛教が如何なる點に於て卓越して居るかといふことを如實に講明して見たいと考へるのであります。



固より吾々佛教徒の立場から考へれば、佛教は常に宗教の中に於て卓越して居るといふことばかりではないのであつて、廣く思想の問題に入つて、今申したやうな高等なる思想を非難する所の間違つて居る人をも教へるものである。或は單に道德の立場に止まつて宗教の信仰に進み得ない思想をも導き教へんとする所のものである。その他廣くこの人類の文化に關していろいろの意見がありますが、それ等をも整へ導いて行かうとするものでありますから、佛教が卓越して居るといふことは單に宗教として卓越して居るといふだけではなくして、この人類指導の大問題の中に於て、文化建設の大方針の中に於て、佛教は卓越して居るといふことが言はれるであらうと思ふのであります。昔から偉い人が出てこの人類の文化を指導して理想的に完全なるものにしてしようとして、或は政治の上、或は道德の上、その他學問なりいろいろの事業からしてこの人類の終局の目的に向つて進みつゝあるには相違ないのであります、それはそれ／＼の効能のあることには違ひないけれども、それ等を集めても更に缺けて居るものがあるのである。それは即ち佛教が擔任して居る所のこの人間の精神の根本を造り上げ、人間の理想の歸結を明かにしてさうして人類の文化を完成に導かんとする事、是れである。佛陀の明教を除いて考へて居る人間の文化生活、究極的目的といふものに於ては、そこに多大なる缺陷があらうと思ふのであります。

それ故にさういふ廣い意味からしても佛教の卓越して居る點は研究する必要があらうと思ふのであります。今日それはそれほど擴げた意味ではなしに、宗教といふ立場に於て佛教の勝れて居る點を申上げて見たいと思ふのである。それは宗教は人類の文化の中に於て極めて大切な要素を占めて居るものであつて、宗教を除いた文化は多大な缺陷を有つものである。個人の生活に就ても宗教を除外して單に權勢名利とか功利的といふものに於ては、そこに多大なる缺陷があらうと思ふのであります。

名譽達といふことを理想するのみでは、眞の幸福もなく眞の意義も見出し得ないものである。それ故に個人の生活に於ても文化の大成に就ても宗教は多大な必要を有するといふことを前提として、その必要なる宗教の中に於て佛教はさういふ地位を占めるかといふ點を申上げて見たいと思ふのである。

私は細かく總べての宗教の分解は致しませぬけれども、これを大別して考へるといふと、多くの宗教には傳統的の教義信條に抱泥して、その教義信條の基礎が堅固でないものが多いと思ふのであります。然るに佛教は單に傳統的の言ひ傳へただからさうして置くといふやうな獨斷的なものではなくして、總べての教義信條は最も理智的にその根柢から歸納せられて十分に吟味に吟味を遂げてそれから組立てられた所のものであります。故に、一般宗教の傳統に立籠れるやうな、さういふ薄弱な宗教ではなくして、最も鮮やかな人間の理智を喚び起して、その人間の涼やかなる明るい觀念の上に教義信條を教へて行つた宗教であります。

これが今日及び將來に於て人類の努力すべき一番大きな事業であると言つて宜いであらうと思ふのであります。人間の努力すべき事柄はまだ多々残つて居りますけれども、併し大體致しますれば物質の文化を完成し、精神の文化を完成し、さうしてその兩者の適當なる握手調和を圖つて圓滿なる人生の文化を造らなければならぬのであります。その中に物質文化の方に進んで行く根柢に於ても知識が本であります。知識を否定しては物質の文化は開發することが出来ない。精神の文化も亦知識を否定して進んで行くといふことになれば甚だ薄弱なものであつて、到底十全なる目的を達することが出来得ない。それ故に精神文化の道德宗教などに於ては從來と傾きが變つて來るのは、知識を十分に尊重して而も信仰の維持せられるやう

に、理智を尊びつゝ、尙ほその崇高なる精操信念が激濁とするやうに導いて行くといふことが大きな問題である。一方には物質の文化、普通の所謂形而下の文化といふものが理智を基礎にして進んで居るけれども、それがモウ一段進んで一方の穆々たる滋味を帯びたる崇高なる理想と握手する迄にこの理智を啓發して行かなければならぬのである。それ故に人類文化の究極といふものは、簡單に言へば眞に理想的なる宗教が起りさへしたならば、始めて吾々の生存といふものが理想的になつて行くと思ふのである。

故に達人はその事を申して居るのである。二十世紀の人類の第一に數ふべき事業は、即ち高等なる理智と純潔なる信仰とを握手せしめて、それがあらゆる文化を指導する所の權威を持つやうに戻さなければ人類の文化は完成しない。この儘で進んで行けば破壊と暗黒に向ふより外に途が無いといふことを言つて居るのである。

さういふ大きな問題を解決して進んで行かうとする場合に、佛教が傳統的の教義信條に依らずして總べて合理的に歸納的に、理智を尊重しつゝ、教義信條を組立て、進んだといふことは、教を開かれたのは古いやうだけれども、この二十世紀の人類の新しい要求に應へるやうな組織を以て起つて居るものであつて、佛教は古い宗教であると言ふも事實であるけれども、而も最も新しき意義を有つて居る宗教と言つて宜いのである。世界のどれ程新しい宗教と言つても、佛教ぐらゐる新しい意味を有つて居り、激濁たる生氣を有つて居る宗教は無いと私は考へる。その點に於て佛教が卓越して居る事を證明致したいと思ふのである。

又次には宗教の立場は精神的でなくてはならない。即ち精神文化の中堅に立つべきものであるから、いろ／＼の形式皮相の事柄を以て尊しとするやうな宗教は、「ア、有り難い」と思ひ込んだ盲従的の人間には

用をなすけれども、今後新たに宗教を求めて進んで行かうとする人間の爲には、意義の分らない、何故にさういふことをするのか、その筋道の分らぬやうな形式を尊重するといふことは出来ないことである。所が宗教の大部分は形式に重きを置いて居るのである。今日の佛教なども大部分形式化して居るけれども、それは後に起つた事柄であつて、眞の佛教、佛教の根本精神といふものは、形式に反對して精神的に起つた所の宗教である。無論宗教には精神が定つて或る程度の極く簡單な形式は起つて来る、掌を台せるとか、頭を下げるとか、お経を讀むとかいふやうなことは起つて来るけれども、それは何事にもその位のことには起つて来るのである。別段宗教と言はなくても倫理の話をして、頭を下げるとか行儀を良く坐つた方が宜いとか、書物でも讀む前に一度戴いた方が宜いといふ位のことには起つて来るのである、それは總べて人間といふものが身體を持つて居る以上は、精神的に考へることが直ちに形に現はれて来るのであるから、或る程度の形式は何事にも認めなければならぬ。詔書奉戴式を行ふといふことになれば、詔書の精神さへ守つて行けば宜いやうなものだけれども、やはり三寶の上に載せて、さうして叮嚀にそれを聞いて聲朗かに讀む、聽く者皆な最敬禮を表するといふやうなことは、これは自然に起つて来ることであるから、さういふ程度の形式は無論佛教に於ても尊重するけれども、今申す形式といふのは、例へばお百度を踏むとかいふので裸足になつて冷たい石の上を行つたり來たりして居るとか、或は護摩を焚くとか言つて木を燻べて煙の中で眼をパチクリさして居るとか、さういふやうな形式そのものが有り難いやうに考へられて居ることが宗教には澤山あるのである。

所が佛教は一切教を通じて殆んどさういふ形式に重きを置いて居ない。眞言に屬する所の密部と稱する

もの、中には、大日經を始め具縁品と稱してあゝいふいろ／＼の儀式のことが澤山出て居るやうであります。すけれども、恐らくはこれは所謂後世の混入であつて、お釋迦様のお説きになつたものではなくして、佛敎以外にあつた婆羅門のさういふ事柄が混じて入つて來たものであらうと思ふ。それはモウ明瞭にさう斷定し得るものであると私は考へます。その證據は歴々として擧げることが出来る。現在の日本佛敎には割合にさういふ婆羅門の方から混入して來たやうなものが、多量に相成つて居ると思はれるのであります。純粹の佛敎に於てはさういふ形式には決して重きを置かない、全く精神的なる宗敎であります。今日及び將來に興隆しなければならぬ新しき意味の宗敎としては、精神的なるものでなければならぬのであります。一般の宗敎が形式に流れんとするに對して、佛敎はそれを淨めて起つた所の精神的宗敎であるといふ點に於て、又卓越を誇ることが出来るのであります。

それから又宗敎には非常に澤山迷信的色彩があるのであります。無論宗敎を信じて御利益を蒙むといふ觀念は悪いことはありませぬけれども、迷信といふのはどういふことかと言へば、その御利益を貰ふといふ事柄のみが非常に濃厚になつて來るのである。濃厚でも宜しいがそれが公正を缺いて來るのである。これは宗敎學でも迷信の定義を下して居るのでありますが、恰度人間の體温は三十六度五分とか七度までといふやうな熱はこれは病氣ではないのであるけれども、それが三十八度になるとか三十九度になるとかいふことになれば病氣である。それと同じやうに宗敎の御利益を三十六度五分、三十七度までぐらゐに考へて居るのは宜いけれども、それが三十九度にも四十度にもなつてしまつて、商賣も廢めてしまつて、穴守稻荷へ行つて砂でも貰つて來れば宜いといふやうなことをやつて居る。それは即ち熱が四十度にも昇つ

て居るやうな譯で迷信といふことになる。所が多くの宗敎にはそれが伴ひ易いのである。又それを伴ふことを喜んで低き宗敎の求道者はそこに集まるのであるが、それが天理教となり大本教となり、いろ／＼な迷信的な宗敎として勃興するのである。日蓮主義の中に於てもやはりさういふやうな祈禱主義のものが割合に多く行はれて居るのである。

所が釋迦の敎はさういふことを否定して起つた所の宗敎である。宗敎には害毒がある、それは迷信の害毒であるといふことを絶叫した所の、所謂宗敎の改革を以て任じて居る者が釋迦である。

何故迷信がいかにぬかといふと、ちよつと考へれば害がないやうであるけれども、それが商賣のことに就ても商賣の方を勉強しないで迷信の方に陥つて行くから、結局失敗してしまふのである。病氣のことも十分の養生もしなければ醫藥も廢して、唯だ水ばかり飲むやうなことになるから、それが爲に却つて重態になるのである。それから又その迷信に伴うてそこにいろ／＼の弊害が起つて來る。例へば「おつげ」といふやうなことが起つて來る。神様がにお下りになつたとかいふやうなことを言ひ出す。さうして「こつちのお醫者様はいかぬ」とか「どのお醫者様が善い」とか、そんなつまらないことを言ふのである。それから又方角を盛に言ふ、その他九星などと言つて、まだ日本では今でも七赤とか八白とかいふやうなことが東京の新聞にも欄外に二つも三つも書いてある、あんなものは何も根據のないことである。何が七赤やら八白やら根據のないことであるけれども、そんな事が麗々と新聞や曆に書いてある。これは皆な迷信である。それから日が吉いとか凶いとか言うて、葬式をするには友引の日はいかぬとか言つて三日も四日も死人をその儘で置いたりして居る。そんなことも何も意義のないことである。左様な日を避けて別の日にや

つたから後が死なぬといふ譯でもない、やはり死ぬのであるからつまらない事である。何も意義を成さない。釋迦如來はさういふことを悉く排斥した、方角がどうちやとか、日がどうちやとか、そんなことは皆な意義のないことであると言はれて、さういふ宗教に伴ふ下らない迷信を悉く排斥した人であります。さういふ點に於て多くの宗教が陥る所の迷信的な弊害を改善して進んで行く所の純正なる信仰、所謂健全なる信仰を鼓吹する點に於て佛教は卓越して居るものである。これは基督教などに較べても佛教はすつと宜しい、基督教は文明國から來たと云ふけれども、割合に迷信的な所が澤山ある。奇蹟とか豫言者といふやうなことを盛に言ふ。この豫言者とか奇蹟といふやうなことは迷信の代表文字である。無暗やたらに豫言者、豫言者と言つていろ／＼のことを言ふのであるが、さういふことを佛教の方に於ては決して執着しないのである。奇蹟といふやうなことは佛教にも無いことはない。それは盲者に對して釋迦如來が眼を開けと言はれたら眼が開いたといふこともある。覺に向つて立てと言はれたら脚が立つたといふこともあるから、基督教で言ふやうなことは率々佛教の中から借りて行つたのであるかも知れないのでありますけれども、佛教にはそんなことが澤山あつても、釋迦が盲に眼を開けと言つたら眼が開いたといふやうなことを振廻さないの、佛教の根本精神はさういふ奇蹟や迷信では無いのである、耶蘇の教は或る意味から言へば頗る貧弱である。材料が洵に少ないものだからして、そこであゝいふやうなことを盛に言ふのである。貧弱といふのは例へば天理教でも大本教でも、あんなものは皆な貧弱である。一つか二つの所が壊れてしまへばあとはモウ空っぽで何にもないのである。佛教は衆生攝化の方法に於ては實に豊富にして、彼等の宗教の幾十倍、幾百倍の教化材料を有するものであるから、そこでそんな迷信的なやうな事柄は使は

ないことになつたのである。尤もつまらない坊さんは今でもいろ／＼さういふやうなことをやつて居るが古來の高僧領袖といふやうな方々は、佛教を宣傳するに於てさういふ方面を用ひたものではないのである。その點に於て又佛教が非常に卓越して居ると思ふ。

それから又多くの宗教が信仰と道德との關係に就て、超倫理と言へば非常に氣の利いたやうな言葉でありますけれども、倫理道德の觀念を軽く見て、さうして宗教特殊の功徳を非常に強く骨張する傾きがあるのである。宗教の内部だけで極めて居る所の善根功徳が特別に廣大な御利益があるやうに言ふのである。世間で人を教ふやうな親切といふものはそれは軽いことである、併ながら宗教の内部で石にお經の字を書いてさうして経塚でも拵へるといふやうなことは大變善いことである。或は釣鐘を拵へる爲に自分でやつて居る鐘であるとかいろ／＼の金物を納めて、それを釣鐘に鑄込んでポーンと撞いて貰へば、今まで犯した所の多くの罪業、男を騙したとか女を苦めたとかいふやうなことが、そのポーンといふ鐘の音で一逼りに消えてしまふ。「これはうまいことだ」といふのでお婆さんなどが、大勢の人を苦めたり、嫁を虐めたりしたやうな人が變なことを持つて行つて、それを鐘に入れて貰つて、ポーンと撞いて、「ア、モウこれで悪い事をしたのは消えてしまつた」と言つて安心して居る。さういふことを非常に強く言ひ募るのである。その言ひ募る反面に於て世間の道德が影響を受けて、宗教が盛になるが爲に世の中の倫理道德を輕んずるやうな弊害を生んで來るものである。

それは近い例でも直ぐ分る。大本教のやうなものは今は殆んど滅びたやうな姿になつてしまつたけれども、あれが盛な時分には、自分の商賣も止めてしまふ、家も賣つてしまつて、さうして丹波の綾部に行つ

て特別な生活をするのが一番の善根功德である。何が人生の功德善根かと言つたならば、家も賣り倉も賣り皆な賣つてしまつて、その錢を三寶に載せて大本教の神像に供へて、さうして自分は其處に行つて共同生活を営むたやうなことをやる。それをしない限りには世間でどんな善い事をした所が駄目である。あらゆる財産を賣つた金を三寶に載せて持つて来ない限りには逆も教はれないといふやうなことを言ふのである。併しそんな事は眞面目に考へたならば何も功德にならないだらうと思ふ。その錢の使ひ方如何に依つて始めて功德は生ずるのである。その使ひ途といふものが無駄な工事を起したり、又それを叩き壊したりして、遂にその金は空費してしまつたとするならば、全く騙されて、詐欺に掛つて錢を取られたのと同じやうな結果になつて居ると思ふ。併ながら一時は滔々として皆なさういふことをやつたのである。それと同じやうな事柄を無暗に言ひ募る、佛教でも殿堂伽藍を澤山拵へて、お寺に寄附をすればそれが偉い功德になるやうに思つて居る。それは功德にならぬことはなからうけれども、今のやうに少しも宗教的の活動をせぬやうな殿堂伽藍を澤山拵へても何にもわからぬ。今日ではお寺を建てるとか殿堂を造るといふやうな事は、却つて無功德になつて居るかも知らぬ。釋迦は一切經の上を見るといふと決してさういふやうなことを鼓吹しては居らない。何にもならぬやうな大きな堂塔を澤山拵へて、坊主がそこに欠伸をして居るやうな所を拵へるといふやうなことは、七千餘卷の佛經を縦横無盡に研究しても何處にも無い。佛陀の説教をした所は會堂も無かつた位である。靈鷲山の説法でも或はその他の場合の説法でも、大抵は上野の公園とか日比谷の公園とかいふやうな所を選んで説教をせられたのであつて、殿堂伽藍のやうなものを盛に拵へるといふことは釋迦は考へて居なかつたやうに思はれる。寧ろ人の心の中に殿堂を築くといふことを釋

迦は理想して居られたと思ふのであります。

さういふやうな點に於ても、宗教の特殊の功德善根といふことを餘りに釋迦は言はぬのである。やはり人の心を淨くするといふことを第一にして居る。人の心を善くし、その行ひを善くして、親子の關係、夫婦の關係、總べて社會的關係に於ての善根を鼓吹したといふ點が非常に多いと思ふ。例へば釋迦の報恩の思想などいふものが彼の道德上の根柢をなして居るのである。恩を受けた者には恩を報じなければならぬといふことを力説するのであつて、その恩を受けた者と言へば家に於ては親兄弟の恩を受けて居る、世の中に於ては國王なり社會の先覺者なり、あらゆる人の恩を受けて居る、世話になつた人がある。その諸々の御恩を忘れてはならぬといふことを以て一番大事なことにして居るのであるからして、さういふ點から考へて行つても釋迦如來の教はこの信仰と道德の關係を定に能く調節されて居るものであると思ふ。斯様に釋迦の教は信心と善根といふもののとの關係を密接に結びつけたものであるが、後に或る宗派が起つて信心と善根とを二分してしまつて、善根などを積んでそれで往生しようといふやうな修行はいかぬといふことを言ひ出した。さうして何でも信心一つで行かなければならぬといふので、信心往生論、善根不用論、或は善根妨害論、善根は却つて往生の邪魔になるといふやうなことを言ひ出したけれども、これは又下らない所に頭を突込んだものである。信心と善根とを對立せしめて喧嘩をさすやうなことは、夫婦喧嘩をさすよりもつと悪いことである。信心と善根とを對立せしめて喧嘩をさすやうなことは、夫婦喧嘩の居るものであつてこれを離すことは出来ない。然るに信心と徳とを對立せしめる。それは安價な信心を弘めて行かうとするにはさうする方が都合が好いからして、そこで宗教を弘めるに急にして、この社會國家

全體の文化を考へない。この全體の文化を水の如く考へ、宗教がその水と調和しない油の如きものになつて發展して行かうとする所にさういふ間違ひが起るのである。釋迦の理想したのは、この世間の外に佛法を立てんとしたものでない、世間そのものを理想的に改善するが爲に教を興へたものである。世間の外に佛法を造るものではない、世間を理想的にし、人を理想的にすることに於て、そこに佛法を興へたのである。坊主を拵へる爲や寺を建てる爲ではない、特別の宗旨を弘める爲に佛法は開いたものではない。一切衆生を教化して總べての人を理想的の生活に導かんとして教を興へたことを考へるといふと、この信心の外にさういふ道徳を輕んずるやうな氣分を起すといふことは、これは釋尊の精神に違反したことである。それは一切經の中から證明の出來ることであつて、洵に愉快に論證されることである。

その點に於て一般の宗教が陥らんとする所の信心骨張論の弊害を矯正する宗教として、佛教は卓越して居るものである。基督教でもやはり神を信じたならばモウあとの事は少々どうでも宜い、信仰を以て義とする、神様を知らぬ限りにはどの位善い事をしても駄目じやと言つて無暗やたらに信心一つを骨張して居る。併ながら釋迦はさういふ説き方をしないのである。その點に於て佛教は一つの特色を有つて居る。

それからモウ一つは一般の宗教が教義並に經典に於て非常に貧弱であると思ふ。貧弱であるといふのはそのお経なりその教義なりを研究して行く上に、今申すやうに理智の側からも研究する、道徳の側からも研究する、純宗教としても研究する、その他人類文化の目標を立て、研究するといふ具合に、人間の進化したる所の知識を以て縱橫無盡にその宗教を研究して行くといふと、非常に貧弱なる宗教が多いのである。半年も研究して行く中にはモウ支離滅裂になつて、「ア、こんなものはつまらぬ」といふやうに皆な捨てら

れてしまふものである。それは左様な理智的研究をしない者は、大本教でも天理教でも儒でも釋でも宜いといふやうな譯だから、譯も分らずにやつて居るけれども、本當に宗教の研究をして、これを哲學上の觀察から見たらどうなるか、道徳上から見たらどうなるか、又純宗教としての必要な條件から見たらどうなるか、或は又國家の側から眺めたらどうなるかといふ風に、その宗教を縱橫無盡に研究して行く場合には非常に貧弱なるものであつて、忽ちその價値を失墜するやうな宗教が多いのである。

これに反して佛教は、若しもさういふ場合があつたならば實にその希望に副ひ理想に適ふ所の宗教として、經典に於ても教義に於ても頗る豊富に完備して居る所の宗教である。所謂教義としては八萬四千の法藏と言はれる位にあらゆるものが悉く整うて居る。お經の卷數から言つても五千卷七千卷の經卷と稱するが、それが實に立派なお經が多いのである。中には間々大した價値のないお經もあるけれども、大體華嚴阿含、寶積、般若、法華涅槃と稱する一代五時の經典といふものは實に立派なお經である。恐らくは世界の書物の中に於て、この佛教の例へば法華經とか或は華嚴經とか涅槃經とかいふやうに、哲學の意味もあり、道徳の意味もあり、宗教の意味もあり、その他人類の文化を完成する大方針を指示した書物が他にありかどうか、實に群を抜いて居る、比較を絶して居るものである。佛教の次にはどの宗教があるといふやうなものはない。恰度相撲で言へば太刀山が全盛時代には、何時でも國技館に行つて見れば太刀山の全勝の額が掲げられて居つたやうなもので、モウ對手になるものがない、土俵に上つても取組むまでもなくポンと一つ突けば飛んでしまふ。それと同じやうに、佛教の前に立つて優劣を比較せられるやうな宗教は世界にないのである。西洋の學者は基督教に心酔して居るし、基督教を以て手本として比較をするから、佛



教と言つたならば何か宗教上の少しばかりの所で基督教と違ひがある、それも極く消極的な空混業でも考へて居るものぢやといふやうなことからして佛教を見て居るから、西洋人には眞の佛教を知つて居る者は先づ一人も無いと言つて宜い譯である。それ等の言ひ草を受け繼いで來たものが、今日の日本の學者と稱せられる者の大部分なのであるから、先生が既にさうである、その弟子達に無論佛教の事が分るものではない。併ながら佛教は西洋人の考へたやうなそんな消極的なものではない。今申す通りに哲學上の考察として、これに合格する宗教は世界唯一である、唯だ佛教あるのみである。道德上の考察としても今申すやうにその根柢から人倫道德を説明した宗教としては、佛教が最高點に位するものである。又純宗教の側から考へてもさうである。その意味を立證することは私は洵に易々たることであると信じて居る。即ち他のあらゆる宗教は經典教義に於て貧弱であり、薄弱であるけれども、佛教はその點に於て豊富であり堅實である、こゝにも卓越を誇る事が出来る。

それからモウ一つは開祖の人格である。多くの宗教の開創者はその人格に於て缺けて居る所があると思ふ。偉いと言へば偉いやうである、一方から眺めるから偉いやうに見えるけれども、例へば耶穌なら耶穌といふ人は、一方から見れば非常に熱烈な宗教家であるといふけれども、他面からこれを眺めたならば非常に僻した所の偏調者であつて、決して智情意の三方面が完成して居る人格者であるといふ事は言はれないと思ふ。それは彼の經歷から考へても、彼は決して學問をしたものではない。今まで基督教の人が誇つて居つたやうに、基督は學者ではない、彼の説く所は學者の如くならず、權威を有るもの、如くなればなり」といふことを基督教の人は一つの誇りとして居るので、決して理智的に説明するのではな

い。根柢を明かすのではない。是は斯うしなければいかぬ」といふやうな風にやつて行く點に於て、權威を有る者が命令するやうな態度である。總べてさういふ風な行き方であつて、それは成程宗教をさういふ具合に考へて宜いと思ふ人もあるだらうけれども、半面から眺めればこれは非常な獨斷である。唯だ權威を以て親が子供を叱るやうな具合に「そんなことをしてはいかぬ」と言ふのである。これは大本教などでも皆なさうである。決して説明をするものではない。「これは斯うしなければいかぬ、さうしなければいゝが當るぞ、死んでしまふぞ」といふやうなことを言つて威かしたりするやうなことを言ふのであるが、佛教はさういふ行き方は決してしない。釋迦の人格はさういふ偏調のものではない。これは多くの宗教の開祖の人格を見たら直ぐ分ることである。古い時代のことは色々理想化されたり、傳記の上に作り事が多くなつて居るから分らぬけれども、近來生れる所の宗教などを見たならば最も能く分るのである。あれも宗教の一つと言はれるかも知れぬが、この頃新聞の問題となつて居る飯野吉三郎とかいふ男が神様と呼ばれて居る、その神様の人格を今茲に研究して見たならば能く分る。新聞の記事ぐらゐのことではなしに、本人にも會つてその經歷も研究し、いろいろ觀察して見たならば、その人格に於て非常な缺點がある。唯だ一方に何か人の意表に出るやうな珍らしさうなことを言つたり、思い切つたやうな事を言つたりするやうな特色があつても、それが決して完全なる人格者ではない。彼の學問の經歷、道德上の人格、或はその他の事柄に於て十分に研究をせられたならば、多大の缺陷を有するものではなからうかと考へるのである。それは誰でもそんな風になつて居る。宗教家ナンといふものはちつと偉いやうに見えても一方に非常な缺陷がある。法然や親鸞のやうな人でもやはり私はさうだと思ふ。淨土宗や眞宗の人は非常に偉い高僧だ頑徳

だと言ふけれども、やはり完全なる人格者の側から眺めると反面に非常な缺陷を有つて居るものである。或は又禪宗の達磨といふやうなものでも非常に偉いやうに言うて居る。壁に向つて無言の行をやつて居つた、さうして親が死なうが國が滅びやうがそんなことは我に於て何かあらん、お玉杓子が死ぬのも親が死ぬのも同じことぢやといふやうな調子でやつて居つたと言ふ。それはまあそこが偉いと言へば偉いかも知れぬけれども、一方から考へれば人格的に非常な缺陷があると言はなければならぬ。さういふ風に必ず宗教家といふものに於ては偏調な所が多いのである。

然るに釋迦はその點に於て獨り違ふのである、何處から眺めても實に完全な人格者である。それは後には三身即一身といふ如來にもなつた位に、法身の理智の側から眺めれば眞理の結晶である、智慧の側から言うたならば智慧の完成者である、慈悲の側から言うたならばモウ全身が悉く慈悲に満ちて居るといふ位に、釋迦といふものは實に容易に見透すことの出来ぬ程な大人格を有つて居つたものだと私は考へる。それは色々の説明となり或は傳説となつて傳はつて居るけれども、實にその點に於ては偉いものである。殊にその中に於てどういふ點が一番偉いかと言へば、前にも申した理智と慈悲——この非常な明かなる大智慧と非常な温かな大慈悲とを結合して、それを以て一切衆生を救はうとする所のこの剛健なる氣象、偉大なる力を備へて居る。釋迦は實に智慧に於ても慈悲に於ても力に於ても絶對といふことを言うて居るのである。

彼の力は彼自ら「力無所畏」と言つて力に於て完全なものである。或は如來の神力と言つて居る。これが釋迦の人格の完全な所以である。世の中には佛教は腰抜けのやうに考へて居る人がある、坊さんナンといふものは少し大きな聲で怒鳴られれば黙つて引つ込んでしまふものだといふ風に考へて居るけれども、それは大變間違つて居る。釋迦ぐらゐ剛健なる勇氣に富んで居る者は無いのである。誰が強いと言つても釋迦の前に勝つた者は無いのである。それは彼の經歷の最初に降魔成道の一節があつて、人間の敵ぐらゐは無論問題にならぬ、提婆達多が非常な悪人であつて彼に敵對したけれども、遂にどうすることも出来なかつた。阿闍世王が國王の威力を以て敵對したけれども而もどうすることも出来なかつた。阿闍世王は十頭の象に酒を飲ませて暴れさせて、さうして釋迦を踏み殺さうとしたけれども、釋迦は醉象の爲に踏み殺されない、大盤石を落して押し潰さうとしてもその石は釋迦に當らない。如何なる強敵と雖も彼は決して敗けないといふことは、釋迦の傳を貫いて居る大きな事實である。そこで無論人間ぐらゐは敵でないからと言ふので今度は毒蛇などが澤山出て來て居る。毒蛇が毒を吹いて釋迦の前に近寄つても、釋迦が慈愛の眼で見ると毒蛇は忽ち頭を垂れてしまつて、一遍でも毒蛇の爲に噛まれたとか、それが爲に釋迦が逃げ出したといふやうなことはなかつたのである。毒蛇が火を吹いて出て來たといふことは釋尊の傳記に澤山出て居る、それはどういふことであつたか、釋尊が山に行くとか或は古い建物の中に行くといふと、中から毒蛇が出て來て火を吹いたといふことがお經の中に説いてある。併し彼が一たびその慈悲の背を以て見れば、如何なる毒蛇もうなじを垂れて決して喰ひつかかなかつたといふのである。そこで惡魔は尙も釋迦を苦しめんとしているの形に現はれたと言はれて居る。終ひには劍を以て突き殺さんとし、矢を以て射殺さんとしたけれども、釋迦は泰然として不動の状態に居つて、汝等左様に劍を投げたからと言つて少しも屈かぬではないか、横から投げては當るまいから天に昇つて我が頭の上から投げたら宜からう、一本や二

本では外れるかも知れぬ、雨の降るやうに劍を投げたらどうぢや、さうして我が體に隙間もなくその劍が突き刺さつて、我が體は一寸刻みになつてしまつた所が、それは我が肉體が刺されるだけで、我が精神には一微塵の疵をも與へることは出来まい。我が肉體は劍を以て突けば血が出るに極まつて居る。併ながらこの我が心はお前等が幾ら反對したからと言つても髪の毛一筋も動くものではないといふことを言つて居る。その勇氣の現れといふものは實に偉いものである。その言葉を聽いて惡魔はへこたれて逃げ出したといふことが説いてある、降魔成道の一節はそれである。これは何も釋迦が徒に敗け惜みを言はれたのではない。我が體は寸断にされたからと言つても我が心は少しも動くものではないといふその決意の剛健なるが爲に、遂に惡魔が退散をしたといふのが釋迦傳にある所の事實である。實に剛健なるものである。だからどんな鬼見たやうな者でも皆な釋迦の手下になつたのである。釋迦はあらゆる力強い者の大親分である。金剛神といふやうな者が劍を以て出て來ても、或は毘沙門天でも何でもそれ等は皆な釋迦の前には唯々諾々としてその御用を勤めたものである。

斯ういふ點に於て彼の人格は、唯だ優しいといふ一面だけではない。智慧の剛に於ても慈悲の剛に於ても勇氣の剛に於ても實に完備して居るものである。あらゆる點に於て釋迦の人格は完成して居る。殊に今日の西洋文化を見るに就て非常に嘆かしく思ふことは、西洋は宗教と學問とが大體二分して起つて居る。希臘から學問が起り、ヘブライの方から宗教が起つたといふので、ヘブライ民族の間には宗教の濃い信仰が發生をしたけれども、希臘の方に於ては哲學の方から出發をして、その文化の衝突が遂に融和することが出来なかつた。今日に至つてはその濃い方の文化が打ち破られて、希臘の文明が勝ちを制す

るに至つて、理智の冷かなる文明に依つて押し進まんとして遂に世界は今日に來つたのである、それが人類に斯の如き禍ひを起したものである。又宗教ばかりが盛になつても中世紀のやうな暗黒時代を現出して、羅馬法王が横暴を極めたやうなことになるのである。斯の如く西洋は宗教に勢力を與へてもやり損ひ、學問に勢力を與へてもやり損ふ。それはつまり不具と不具が寄つて居るからである。それであるから西洋の今日の禍ひといふものは、到底救はれ難い根柢を有つて居ると言はなければならぬ。不具が二人寄つたら完全な人間になると思ふのはそれは非常な間違ひである。例へば片目を二人寄せたら二つの目であるから一人前になるかといふと決して一人前にはなれない。左の手の缺けた奴と右の手の缺けた奴とを合せて、二本の手がありさへすれば役に立つかと言つたならばさうはいかない。それは大體人が違ふのであるから、米を一俵持ち上げると言つて見ても決して持ち上げられるものではない。不具と不具とを寄せて完全なものが出来ると思つて居るのはこれは西洋文化の永久の失敗である。その證據には偉い學者と偉い宗教家とを寄せたならば満足なものが出来るかといふとさうはいくまい。一方は非常に宗教に僻した所の感情的の、何を言つても神様が神様がといふやうな宗教家と、一方には何を言つても冷たい理屈ばかりカン／＼言ふやうな學者と二人合せたならばうまく行くかといふと、この二つの不具を寄せたのでは世の中はさうしてもうまく行きつこはないのである。二人を一緒にして飯を食はして置いても駄目である。要するに一つの頭を完成しなければ人類の文化は圓滿に發達するものではない。西洋は大勢の人が出たやうだけれども、根本に於て希臘の文明とヘブライの文明と言つて、哲學者と宗教家といふ二つの不具が出て來て喧嘩をして居る限りに於ては、西洋は救はれないものである。

東洋には釋迦といふ偉人があつて、希臘の學者が持つて居る哲學よりもつと完成したる理智を有ち、又西洋の宗教家の基督などの有つて居るよりもつと圓滿なる宗教情操を有つて、それを一つの頭ですつと統合して居るのである。そこから割り出して來た所の佛教であること故に、これがどうしても最後の勝利を占めるものである。二十世紀の吾人人類が努力しなければならぬ唯一の大事業を完成して居るものが釋迦の頭腦である。この釋迦の頭腦を借りて來れば二十世紀の人類の事業が完成されるのである。斯ういふ點に於いて佛教は卓越して居ると考へる。

また數へ挙げればその他にも澤山の特色があるが、モウ一つ附加へて置きたいのは佛教の歴史である。歴史といふものは大事なものである。「元は非常に善かつたけれども、それがだん／＼つまらぬ事をするやうになつた」と言へば、そこに歴史の汚れといふものがある譯であるが、佛教の歴史には——それは小さなやう損ひは澤山ある、つまらぬ宗旨などを拵へたり、くだらぬ坊主が出たりして人を騙したり、そんなことはしたらうけれども、それは部分的の間違ひである。佛教史を通じての全體を大觀すると、佛教といふものは決して大きなやう損ひをして居らぬ。佛教が盛になるが故に人類の文化を阻害して人間の知識を否定するやうなことをやつたことはない。それは中には左様な事を言ふ宗旨もあるけれども、それは未の一部分にあるのである。佛教の全體を通じて人類の上に進んで來た有様といふものは、西洋の宗教が人類に與へたやうな暗黒の時代、或は又戦争をして無暗に惨虐な事をするとか、宗教の衝突の爲に刀を以て戦ふとかいふやうなことは、佛教の歴史に於ては未だ會つて無いことである。佛教が人類の文化を暗黒の状態に導いた事もなければ、又佛教に依つて戦争の如き殺伐の氣風を煽つた事も無い。寧ろ佛教に依つて人

間を賢くし、人間を善人にし、人類の文化に相當な貢獻をし來つたといふ事が今日までの歴史である。この佛教の歴史が又他の宗教に比較して非常に清いといふことが言ひ得られると思ふのである。以上は序論として大要をお話したのでありますが、斯様な點に就て更に少しく詳細に佛教の卓越して居る所以を闡明して見たいと思ふ。

大僧正 本多日生師著

修法勤行の心得

目次

一、緒言……一、法華修行の目的……二、法華修行の作法……イ、勸請……ロ、修法……ハ、祈願文……ニ、回向文……ホ、持受文……

定價 一部 金十五錢 送料二錢  
拾五部 特價金一圓(送料共)

大僧正 本多日生師著

宗教の五綱に就て

本誌に連載せし「國家の興隆と佛法の興隆」の結論なり。  
定價 一部 金十五錢 送料金二錢  
十五部 特價金一圓(送料共)

大僧正 本多日生師撰

法華經要文

改訂再版全文四卷  
紙裝一部 金十五錢  
布裝一部 金五十錢  
紙裝一部 金三十五錢 送料二錢

發行所

名古屋市東區田代町常樂寺

編輯局

振替名古屋一〇八一九

日蓮主義より見たる無量義經

(第二十五回)

井村日威

於時大莊嚴菩薩(中略)大饒益無量一切衆生令一切諸菩薩摩訶薩各得無量義三昧或得百千陀羅尼門或令得菩薩諸地諸忍或得緣覺羅漢四道果證世尊慈愍快爲我等說如是法令我大獲法利甚爲奇特未曾有也世尊慈恩實難可報(四三、一—四四、一)

第九段に「得益を明す」で無量義經を聽聞したる時會の會衆がそれ、各自の智識程度に隨ふて、或ものは菩薩の利益を得る、其も其程度に依つて種々に異ふた利益を得るのである、或は緣覺の證を得るものあり、或は聲聞の悟を得たるもの等種々の利

益を得たことをお説きに相成つて居る、佛の説法は一つであるが聞く方の境遇が異なり知識が違ふに依つて、其説教を了解することが幾つにも分るのである、其れが萬機を漏らさざる所以である、經に「佛以一音演說下法衆生隨類各得解」と説くは即ち是である、佛の説法は一音である、一つの説法であるが、聽く方は種々の解了を得るに依つて其利益に差別を生じて來るので、佛教の思想が分裂して居る様に見えて居るのは、聽き手の思想が幾つにも分れて居る結果であつて、佛陀の教が幾つもあるのでは無いと云ふことを考へねばならぬ、聽き手の方が進歩さへすれば、佛の本意たる一乘の教に入るこゝが出来、聽き手の頭が進歩して居るか居らぬか

に依つて佛教の統一の歸趣が得らるゝか否かゞ分れる、如來成道已來此經を説き給ふに至るまで四十餘年間の説法は聽き手の頭を整頓進歩すべく努力せられたのである、四十餘年間の説法は衆生をして遂に一乘の教を受け入らるゝ迄に進歩せしめられたのである、此經文の終りの「世尊慈愍して」より下の文は、世尊の説法に對する感謝の意を表した言葉で、世尊の慈恩實に報じ難し」と御禮を申し上げて此一段を了つて居るのである。

作是語已爾時三千大千世界六種震動

於上空中復雨種々天華(中略)作天伎

樂歌歎於佛(中略)(四四、一—四五、二)

第十段「時衆の供養を明す」一段で、此經を聽聞して、歡喜の餘り佛に對して種々の供養を捧ぐるのである、華を雨らし香や衣や無價の寶杯を雨し、百味の飲食を供へ、音樂を以て佛徳を讚歎する等の諸種の供養がある、此は佛の法施即ち、教を與へらる

に對し、謝恩の意を表現せんと欲して、財施身施の物質上の供養を爲して居るのである、聽き手の方としては其誠意を表現するには物質上に於てするの外は其意を表はし得ないのであるから、形の上に表示して感謝の意を現して居るものである、此は今日に於ても教の法施に對して財物を供養して謝意を表して居るが同様の意味合である。

爾時佛告大莊嚴菩薩摩訶薩及八萬菩薩摩訶薩言汝等當於此經應深起

敬心如法修行廣化一切勲流布常當

慇懃晝夜守護令諸衆生各獲法利汝等

眞是大慈大悲以立神通願力守護此經

勿使疑滯汝於當時必令廣行闡淨

提令一切衆生使得見聞讀誦書寫供

養以是之故亦疾令汝等速得阿耨多

羅三藐三菩提(四五、三—四六、一)

是より下、經を終るまでは第十一段「付嘱を明す」のであるが、其中に一、如來所付の文である、大莊嚴等の八萬の菩薩に對し此經の宣傳を命ぜらるゝ御言葉が此文である、汝等は此經を聞いて大利益を得て、歡喜身に偏くして居るが、其歡喜を多くの人に類ち與へて共に喜悅に生く様せよ、夫を爲すには此經を守護して廣く世間に宣傳し、一切衆生をして見聞し讀誦し書寫せしめよ、然らば汝等の菩提を成ずることも速かならんと仰せられたのである、此御命令に對して謹んで御請を致すと申上げたのが次の文である。

是時大莊嚴菩薩摩訶薩與八萬菩薩(中略)俱共同聲白佛言世尊我等快蒙世尊慈愍爲我等說是甚深微妙無上乘無量義經。敬受佛敕於如來滅後當廣令流布是經典。者、普令一切受持讀誦書寫供養。唯願勿垂憂慮。(下略)

るのである、佛の教を信すると言ひながら但自己の我欲を満足せしめんとし、他を化導するを怠るものゝ如きは決して佛弟子として許さるべきでない、常に法利を以て廣く一切に施してこそ佛の教を信するもの、眞の佛子と御許し下さるのである、此文は佛陀の教を信するものに對する頂門の一針と申すべきであらう。

爾時大會皆大歡喜爲佛作禮受持而去

(四七、四)

第十二段「總結」の文である、此品の結文なるのみならず、無量義經全體の總結である、一會の大衆皆法悅に入り佛に禮拜を爲し退座したのである、如何なる場合でも佛の御説教は我等をして法悅歡喜の情を充たしめ給ふので、其歡喜の中に幸福を得て我人生を有意義ならしめらるのである、如來の御教に接して法悅の境に安住し得ないのは未だ教の眞意を會得せざるの結果である、歡喜法悅の境に入る迄

誦書寫供養。唯願勿垂憂慮。(下略)

(四六、一—四六、九)

附屬の二「菩薩命を奉ず」一段である、我々共は世尊の慈愍に依りて是經を聽聞するを得た、今は佛敕を蒙りて滅後弘經の任に當るべく敬んで其命を奉ず、願くば憂慮ましまさざれと御答申上たのである。

爾時佛讚言善哉善哉。諸善男子。汝等今者眞是佛子。弘大慈大悲深能拔苦救厄者。一切衆生之良福田。廣爲一切作大良導師。一切衆生之大依止處。一切衆生之大施主。常以法利廣施一切。

(四六、九—四七、三)

三に佛説め給ふ段である、此經に宣傳に志してこそ眞の佛弟子と言はるゝ、大慈悲を以つて一切衆生の苦厄を救ひ、一切衆生の大導師と爲つてこそ菩薩行を行すものと言はれ、佛道を行すものと言は

努力すべきことが大切である。

以上無量義經の全文を一通りお断を致した次第であるが、此經は前にも申した通り説達の次第と云ひ、其内容と云ひ佛敕の大綱を會得するに最も要領を得易き經文であるが故に再三繰返し御研究相成る様御勧め致します、然し此經は法華經の序分である次に、後の正宗分たる法華經に來つて始めて説き明された、迹門の教法統一の理想と、本門の久遠の開顯即ち佛陀の實在の意味が説き隠されあるに依つて、此經に此本迹二門の二大教義を附け加へて始めて、完全なる佛敕教義と爲るのである、法華經の二大教義は佛敕教義の中心生命であるから、此を忘れて居つては、如何に此經の讚佛の偈が佛陀の各方面を完全に説明かしたと言ふても、生命の無い佛陀と爲つて仕舞ふことに成るから、折角の讚佛の偈が死んで仕舞ふことに成る、故に此點は充分に注意して此經を研究せられんことを希望致します、此にて本講を終ります。

# 法華經要文講義

本多日生

## 觀世音菩薩普門品第二十五

この品は觀世音菩薩の普門示現と言つて、三十三身に身を變現して衆生を濟度する事を説いた爲に、この題號があるのであります。普門といふは、種々様々なる形に現れて衆生を教化する、即ち衆生を攝化する所の方法が普く行渡つて居るといふ意味で、普門示現といふ事を言ふのであります。即ち様々に身を變現する事を言つたものであります。それでこの品の組織は、觀世音菩薩が種々に身を變現して衆生を濟度し、又その教が、現在の種々なる厄難を救ふやうな事が説いてある。それが爲に法華經に關する俗信としては、觀世音が中々多くの者に信せられたのであります。併しこの普門品の根本の精神は、

即ち三十三身に身を變現して衆生を濟度するので、その濟度の根本精神は、この現在の生活の厄難といふやうな事ではなくして、やはり佛敎の根本の教を意味して居る。形の末から言へば、觀世音菩薩が無畏を施すといふ事は、泥棒に遭ふ時分にそれを救ふとか、或は火事に遇ふ時分にそれを救ふとかいふ事が無畏を施すといふことのやうにも見えますけれど、根本の無畏といふのは、所謂宗教的安心立命を指すのであつて、確實なる信仰に活きなければ、唯さういふ枝葉の事柄を以て無畏は得られるものではない。それは一難去つて又一難といふやうな譯で、その「一難去つて」といふ事だけ言へば無畏のやうであるけれども、直ぐ又「一難來る」といふ事から

言へば、無畏が直ちに破れるのであるから、觀世音菩薩を「施無畏者」といふ根本の精神は、やはり佛敎の精神的救済を意味して居るものであります。

さうして三十三身に身を變現するといふ事も、たゞ觀世音菩薩の活動の盛なる事を説くといふよりは、觀音すつ三十三身に身を變現す、如何に況や本佛釋尊に於てをやこいふやうに、菩薩の働きを以て本佛の活動の偉大なる事を顯す意味が、この品の根本精神である。前の妙音品には、妙音菩薩が三十四身に身を變現して、衆生を教化する事が説いてある、その妙音菩薩は東の方から來て釋尊を讚歎し、今この觀世音菩薩は西の方より來て釋尊を讚歎するので、東西の二方を擧げて十方を攝すと天台大師も釋したやうな譯で、十方の佛が使を遣はして釋尊の威徳を讚歎するのが趣意なのであります。たゞ觀世音菩薩の効能を説くのが目的ではないのであります。

觀世音菩薩が無盡意菩薩から受けた所の瓔珞を、

釋尊に奉る所に於て、その意味は頗る明瞭になつて居るのであります。それ故に今この要文としては、概括して觀音が色々の厄難を救ふ事と、それから觀音の釋尊に對する態度とを擧げて、この普門品全體を代表せしめようと思ふのであります。

この普門品には偈頌がありますが、併しこれは羅什三藏の譯した法華經には無いのであります。後に添品法華經が渡つた時に笈多に依つて譯出されたと謂はれて居ります。隨つて天台大師の「文句」の中にも、この偈の解釋は無いのであります。法華經が六萬九千三百八十四字あると言つた場合には、普門品の偈は入つて居ないのであります。ケルン譯の法華經では、普門品の偈には、觀音が彌陀の弟子として居る、併し今の日本にある法華經には、偈は入つて居るけれどもさういふ事は無い。若しさういふ風に、觀音が彌陀の徳を宣揚するといふ事であれば、

これは法華經の中にあるべきものではない。それは今の瓔珞を釋尊に奉る態度の所に見て、又東西の二方を擧げて十方を攝して、釋尊の威徳を光揚するといふ點から見て、その意味は採。事が出来ない、壽量品の根本の精神に違反するやうな意味に於ては、それを認める事が出来ないものであるからして、ケルン譯の法華經は、その點に於ては羅什譯には到底及ばないものである、後の混入と考へなければならぬ。それを南條氏などが、ケルン譯の原本に依つて譯出したと言つて、觀音が彌陀の徳を宣揚するといふやうな言葉がある爲に、喜んでそれを引いて來るといふやうな事をして居るが、何ばそんな言葉があつても、法華經の大精神といふものが方便品と壽量品との教義に依つて支配されて居る以上は、さういふやうな紛らはしい言葉のあるものを歡んで迎へるといふやうな事は、それは法華經の中に於て法華經を壞さんとするもので、甚だ良くない態度であると思ふ。

施無畏者といふのである。この經文は即ち觀音の徳を稱揚した一節であつて、これだけの言葉の中に、普門品全體の色々觀音の効能を述べてある事は納まつて居ると私は考へるのであります。之を細かく説き分ければ色々の事になつて來るのであつて、即ち「怖畏急難」といふ事を、一々その例を擧げて色々の問題に分ければ數多くなるだけの事であらうと思ふ。所が觀音は、元々その名前の觀世音といふ事が、世音を觀じて、言葉を以て衆生を教化するのが目的であつて、泥棒の難を救ふといふやうな事ならば、「觀世音」といふ名前が既に合はないのであるから、普門品に左様な事の説いてあるのは、それはたゞ一應の説明である。觀音の發願は説法教化に在る、その爲に觀世音といふ名前が附いたのである、それは首楞嚴經に於て、觀音が自分の名前の事を説明した文殊菩薩との問答の一節に於て、明かになつて居る事なのであります。即ち娑婆世界は耳根得道の衆

二六八  
それ故に私の引證する二項目で事が足りるので、色々の廣い事をやつて迷つて行く位ならば、そんなものを見ないで、この二項目に於て普門品の精神を押へた方が宜からうと思ふ。

一六七、是の故に汝等應當に一心に觀世音菩薩を供養すべし、是の觀世音菩薩摩訶薩は怖畏急難の中に於て能く無畏を施す、是の故に此の娑婆世界に皆之を號けて施無畏者と爲す。

この所は釋尊が、觀世音菩薩を供養せよといふ事を言はれるので、それは觀音は怖畏急難の中に於て無畏を施すものである。これも前に言ふ通り、表面から言へば泥棒の難を通れる、火事の難を免れるといふ事であるけれども、その奥に徹して言へば觀音の三十三身の化導は、衆生をして宗教の精神的安心立命に達せしめる譯であります。それ故に觀音を

生なるが故に、説法を以て衆生を教化するのが佛教教化の正則であるといふ事を觀音が述べて居るのであります。

一六八、無盡意菩薩、佛に白して言さく、世尊よ、我れ今當に觀世音菩薩を供養すべしと。即ち頸の衆寶珠の瓔珞の價值百千兩金なるを解いて以て之を與へ、是の言を作く、仁者よ、此の法施の珍寶の瓔珞を受けたまへ。時に觀世音菩薩、肯て之を受けず、無盡意、復觀世音菩薩に白して言く、仁者よ、我れ等を恐れむが故に此の瓔珞を受けたまへ。爾の時に佛、觀世音菩薩に告げたまはく、當に此の無盡意菩薩及び四衆天龍夜叉乾闥婆阿脩羅迦樓羅緊那



羅摩喉羅迦人非人等を怒れむが故に此の瓔珞を受くべし。即時に觀世音菩薩の四衆及於大龍人非人等を怒んで其の瓔珞を受けて、分つて二分を作して、一分は釋迦牟尼佛に奉り、一分は多寶佛塔に奉る。

そこで無盡意菩薩が佛に申上げて、觀音が左様にして衆生教化に努力する事に對して、自分は感謝の意を表したいといふことになつて、自分の頸に懸けて居つた所の、色々の寶で拵へた瓔珞、非常な尊い物を取つて、それを觀音に捧げるのである。どうかこの瓔珞を受けて貰ひたい、これは何も願があるからあなたに上げるといふ譯ではない、これは法施の珍寶である——法施といふことは、あなたが説法教化をする所のその徳に對して皆が感謝をするのである、之を財施として捧げるのではない、自分もやは

りあなたの説法教化に賛同を表する爲に、微意を表するのであるから、と言つてその瓔珞を捧げた。けれども觀音は肯て之を受けなかつた、そこで無盡意菩薩が又重ねて觀音に對して、どうか吾々の志を怒れんで之を受けて是れといふことを言つたけれども、觀音は容易に返事をしないで躊躇して居つた。その躊躇した精神は、自分は説法教化するといつた所が、畢竟、釋尊の大化導の中に働いて居るのであつて、自分が中心となつて他から感謝を受けるといふことは心ならぬ事と思ふからして、それで觀音は肯て受けないのである。そこで釋尊は、その觀音の精神を御承知になつたからして、觀音に對して、お前はそれを受けるが宜い、彼等の心事を怒んでこの瓔珞を受けたが宜いと言はれた。釋尊が一言仰しやれば、最早や返す言葉は無いのでありますから、そこで「即時に」とあります、これが目の着け所である。佛が一言仰しやれば、觀音が何と考へて居らう

が絶対服従であるから、そこで「ハッ」といふやうな譯で、自分はそんな物を受けぬ方が宜いと思つて居つただらうけれども、釋尊から命令一下して、それを受けるが宜いと言はれたから、そこで觀音は恐縮して、直ちにその瓔珞を受けたのであります、この「即時に」といふことは非常な大事な點であります。觀音と雖も、どれほど釋尊に對して敬意を持ち、服従の態度を執つて居るかといふ事が、この「即時」といふことに於て現はれて居るのであります。さうして受けたは受けなければ、直ぐその瓔珞を二つに分けて、さうして一分を釋迦牟尼佛に奉り、一分は多寶佛に奉つて、やはり自分はそれを受けなかつた。それは所謂推功歸本であつて、その功を推して本に歸せば釋尊の功である、自分が働いて居るといつた所が、決して自分ではない、恰度日本の軍人が戰場で戦つて勝利を得るのも、やはり天皇の稜威の然らしむる所として、推功歸本すると同じ態度に居る。

それが國家に於ても大事であるが、佛教に於てもその大精神を此に現して居るのが法華經なのであります。觀音の事を説けば觀音が有難くなり、彌陀の事を説けば彌陀が有難くなるといふやうな、分裂した信仰觀念は、法華經に於ては採らぬ所であります。この一節が無ければ、觀音が法華經の中に入つて來る事は出來ないのである、縦し入つて來ても、そんなものは法華經の思想に一致しないものであるから、切り捨て、しまはなければならぬ譯である。それを忘れて、觀音堂などを天台宗で拵へて、大に迷信を鼓吹したり何かする、これは皆墮落したるものであつて、俗信である、法華經の教義的信仰には何の關係も無い、世俗の迷信、俗信、墮落の上に現れて居る所の觀音であります。

陀羅尼品第二十六

この陀羅尼品は、五人の方が陀羅尼を説いて、さ

うして法華經の行者説法者を守護する所の誓ひを立てたのであります。陀羅尼といふのは密語であつて、それは病氣を禱るやうな場合にも陀羅尼といふことにはあるけれども、法華經のは祈禱の陀羅尼ではない、法師擁護の陀羅尼であつて、これに依つて病氣平癒の御祈禱などをして居る事は全然間違つて居る。その五人といふのは藥王菩薩、勇勢菩薩、毗沙門天王、持國天王、鬼子母神十羅刹女この五つであります。

一六九、世尊よ、是の神呪を以て法師を擁護せん、我れ亦自ら當に是の經を持たん者を擁護して、百由旬の内に諸の衰患無からしめん。

この所は即ち毗沙門天王の誓願であり、次に掲げるのは鬼子母神の誓願であるが、孰れも法師を擁護する事を説て居る。即ち自分は神呪——陀羅尼に依つて法師を護る、法華經の行者を護つて、その行者

の周圍を常に守護し、法華經の行者に災ひを受けさせないやうに、自分は之を護るといふことを誓ふのであります。日蓮聖人は「持妙法華同答鈔」にこの「令百由旬内無諸衰患」の經文を引いて、立正安國の精神から法華經を盛んならしめれば、その國に於て衰患がないといふ、鎮護國家の上からこの言葉を引き證せられて居るのであります。

一七〇、寧ろ我が頭の上に上ることも法師を惱ますこと莫れ、若し我が呪に順ぜずして、説法者を惱亂せば、頭破れて七分に作るごと、阿梨樹の枝の如くならん。父母を殺する罪の如く、亦油を壓す殃、斗秤をもて人を欺誑し、調達が破僧の罪の如く、此の法師を犯さん者は、當に是の如き殃を獲べし。この所は鬼子母神の誓ひでありまして、「寧ろ我が

頭の上に上ることも法師を惱ますこと莫れ」で、自分は土足に掛けられても腹は立てないけれども、法華經を弘める法師沙門を惱すやうな事をすれば、俺は承知をせぬぞ、それが爲に茲に神呪を説いて居る、斯の如き神呪を説いて居るにも拘はらず、尙ほ且つ説法者を惱亂するならば、その者の頭は破れて七分となる事、阿梨樹の枝の裂けて居るが如くなるであらう——この阿梨樹といふのは、支那や日本にはその木が無いから翻譯をしないのでありますけれども、やはり無花菓の木見たやうに枝の裂け易い木で、無花菓は裂けると白い汁見たやうなものが枝の裂目から出るが、それが阿梨樹といふのは赤い血のやうなものが出る木であります。よく鬼子母神の提燈には柘榴の實がつき物だなどいふけれども、あれは果であるし、經文には阿梨樹の枝とあるから、あんな事も宜い加減の想像でやつたものでありませう。さうして法師を惱ます罪の恐るべき事を譬を取つて、

父母を殺する罪と、法華經の説法者を惱亂する罪は同じい。又油を壓す殃といふのは、油を搾るために、麻を擽いて澤山蟲を生かして、それを一緒に壓搾する、その蟲を殺す所の罪、それから秤をこまかして不正なる利得を得る罪、それから調達即ち提婆達多が和合僧を破つた所の罪、さういふ恐るべき罪と、この法師を惱ます所の者は同じ罪である。それ故に若し説法者を惱亂するならば、我はその者の頭を七分に打ち破るといふことを誓つたのであります。病氣の事など一つも言うて居りはせぬ、法華經全體の守護神である。

日蓮聖人が本尊の中に鬼子母神を特に書いたのは、法華經宣傳の方から來た事である、それを間違へて、日蓮聖人が本尊に「鬼子母神十羅刹女」の字を少し太く書いてあるといふので、御祈禱の方に持つて行つたりしたけれども、それは非常な誤りである。日蓮聖人は正法宣傳の思想が非常に強いからして、

そこで「説法者を憐れせば云々」といふこの言葉に依つて、法華經の行者守護の神として、鬼子母神十羅刹女を特筆した譯である、病氣には全然關係の無かつた事であります。中山の法華經などで鬼子母神などを安置するに至つたのも、あれは後代の事であつて、最初の富木橋磨守などは決してそんな事をしたものではない。日蓮聖人の病を治す事に就いては、「治病鈔」といふ富木殿に與へられたる文章が御遺文の中にある、それには體の病は世間の醫者が治す、佛法は心の病を治すものであると言つて、ちやんと區域を立て、正しい所の教が與へられてあるのである。中山に何か日蓮聖人が祈禱の相傳でも傳へたといふやうな事を言つて居るのは、皆ごま化してあつて、實は眞言の祈禱の一部分を剽竊して、祈禱相傳といふやうなものを作つて居るに過ぎないのであります。皆後代の教義の混亂より起つたものであります。勿論宗教でありますから、病氣に對する祈念

を日蓮聖人がしないといふ譯ではない、伊豆の伊東に於て地頭の朝高の病氣を祈られたとか、或は房州に於て母の養生を願られたとか、或は鎮護國家の祈禱をせられたとかいふ、祈るといふ事はありますけれども、それは陀羅尼品を讀んで祈る譯ではない、又鬼子母神を本尊にして祈る譯ではない、さういふ愚な事は、皆教義の觀念の無い俗物が始めた事である、今なほ日蓮主義がそれを改め得ないといふのは、やはり俗物が多いからである、教義が重いか、賽銭箱が重いかといふ事が分らない輩である、話にも何にもならぬ。私の方の教團にも左様な祈禱僧が以前は少しは居つたけれども、私が明治二十二年に宗門を改革して宗制を制定した時に、さういふ教義を紛亂するやうな者は、如何なる者でも僧籍を剽奪するといふ事にして、それを勵行する爲に自分は監督布教師として長らく全國を巡つて、一軒々々調べて歩いて命令を下して、それに服従せぬ者は皆僧籍を剽

奪したのであります。私等の方は最早や三十幾年前からさういふ改正を斷行して居る、他は言を左右に託して今なほ少しも改めないものであるから、法華經の精神に違反し、日蓮聖人の教義を蹂躪して居る所の者である。それで彼等は少しも改めて居らぬのであるから、本當の事を言はれれば非常に困る譯である、そこで吾輩等の顔色ばかり見て、「どうも頭本法華宗は餘りキツイことを言ふ、あれを言はなければ一緒になるが……」といふやうな事を言つて居る。さうして何時まで経つてもその非を改めないといふ事は、彼等が道念乏しさが爲めである。法華經の精神を蹂躪して、日蓮主義が低級墮落の宗教となつて居るといふやうな事は、これは苟も一天四海皆歸妙法を稱へて、立派に教化の中の指導者を以て任する者のやるべき態度でない。日蓮主義は平凡なる教化運動ではない、教化の誤りを覺醒せしむる教化者の先生である、先生の先生を以て任じて居るのである

から、さういふ問題は一々理義を正してやらなければ、日蓮主義の本領は發揮する事が出来ない譯であります。

一七一、佛、諸の羅刹女に告げたまはく、善い哉善い哉、汝等但だ能く法華の名を受持せん者を擁護せんすら、一福量るべからず。

この所は佛が十羅刹女に仰せられた事で、それは鬼子母神が法華經の行者を護るといふ誓ひを立てたに就いて、その行者はたゞ法華經の名前を受持する者、即ち題目を唱へる者を護つても、その福は量るべからざるものである、況してや法華經の宣傳に任する所の法師を護るに於ては、その功德は更に大なるものであるといふ意味を言はれたのであります。所がこの言葉の中に「法華經の名を受持せん者」といふ事があるので、日蓮聖人は、題目を唱へる事の

證據に始終この言葉を引きかゝれる、經文の精神は、題目を唱へる者を護るさへも、その福は量るべからずと言つて、鬼子母神十羅刹女の、法華行者守護の誓

ひを獎勵したのであるけれども、日蓮聖人は、題目を唱へる證據に能くこの文を引きかゝれるから、序に指出して置くのであります。

大僧正本多日生師著

本尊論

次 目

- 一、緒言
- 二、宗教と本尊
- 三、諸種の本尊觀
- 四、本尊と真理
- 五、本尊と倫理
- 六、本尊と救濟
- 七、佛教の本尊觀
- 八、佛教の三寶觀
- 九、佛身觀の要旨
- 一〇、滅後信仰の概觀
- 一一、佛教本尊の三方面の考案
- 一二、法華經に顯はれたる本尊
- 一三、遺文に顯はれたる本尊
- 一四、本尊の勸誡文
- 一五、本尊勸誡の實例
- 一六、遺文の會通
- 一七、異論の解決
- 一八、結論

定價 紙装一部 金三十五錢 送料八錢  
布装一部 金六十錢

發行所

立正結社

賣捌所

名古屋市東區田代町常樂寺

編輯局 振替名古屋一〇八一九番

罷睡錄 (其九)

黃薇菴 青 村

一八、隣室の睡聲  
觀世太夫がある時一人の弟子を連れ旅へ出で旅館に泊つた。處が隣座敷で一人の男が熱心に謡曲をうたつて居る、其聲と云ひ弟子と云ひ誠に申分が無つた。觀世太夫は弟子に對ひ『どうだ聞分と手に入つたものだ、乃公が一つの謡をやめさせて見ようか』と云ひ乍ら、其場であつた。果して隣室の睡聲は止んで仕舞つた。

手であつたが、乃公が其上を行くので、向ふでは自分より上手な者があるのに驚いて止めたのである。處が今夜は相當上手ではあるが、未だ十分巧拙を聞き分ける程の謡ひ手でない様だ、若し乃公が始めやうものなら、隣では負けぬ氣になつて益々謡ひ出すであらうと言つて聞せた。

を與へぬ馬鹿もある世の中、御用權斷要なり。予度應乙丑の生れ、本年還曆の二、年に九る、生來六十年間分と苦味酸味辛味を嘗め盡して、やつと妙味の域に及第せんとして七絶一首を賦す。  
經來六十一 風霜  
世故變遷感慨長  
幸有還年不死術  
去就進退自洋洋

夫れから二三日の後宿屋へ泊ると、又隣室で睡聲の聲がする、其處で弟子が『先夜の様に又あれを止めさせて御覽になつては如何です』と云へた。觀世太夫は之に答へて『イヤ今夜の止めさせ事六ヶ敷いと云つた、弟子が其の詞を尋ねると先夜のは殊の外上

兎角は牛可通ほど始末のわるひもの、世故の経験なく苦勞の足らぬ連中をば、瘋子とよけて通すが、うっかり相手になるが最後、とんでもない馬鹿を見る事あり。流石は觀世太夫その呼吸を呑みこんで、所聞人を見て法を置く巧いものなり。地方廻りの右教師と名乗りをあげて、前座先生一時間半から二時間も喋り散らし、折角の主任講師に時間

田能久と云ふ旅役者、一人旅して深山の破れ家に泊ると、其處に獲む大蛇白髮の老人と化けて現はれ出で、田能久を呑まんとして、汝は何者だと聞く。田能久ですと云ふのを、田能久と聞き違へ、我を呑んでも詰らぬと云はれ、田能久はつと一身吐いた、が彼れ此れ話の内に、汝は何が一善徳いかと聞かれ、金です、金ほど徳いものには無い、人間が生き死すのは金故だからと云ふと、老人は徳は煙草

の語と梅造が一番情い、あれで攻められたら堪らぬ。併し此事を村の者に話すなよ、若し話したら最後、たゞは置ぬと云ふ内、夜も明けかいつて来たので、老人は妾を消し田能久は山を下りた。が、つい口が七つて村の者に梅造の話をすると、策々村の害をする巨蛇だから退治せよと、語と梅造とを多量に製造り、巨蛇を殺した。田能久は故先から我家に歸つて居ると、一夜門を敲く者があるの、開けて見ると山中で出遭つた老人、血だらけになつて目を腫らし、おのれ能くも約束に背いて俺をひどい目に逢はせた。今思ひ知つたかと云ひ乍ら、小籠に抱へた箱を投げつけて腹の如く妾は消へ失せた、あとで調べて見ると箱の中から小判(金貨)が山の様に出た。

貨幣束で頭を叩かれたとは正に此の、夢に牡丹餅より以上な勿怪の幸福。何の氣もなく田能久と姓名を名乗つたのが大當りの上に、何の氣もなく里人に口を交はし生を思むる種とはならなかつた。

(小山内薫「盲教者」)

人は何でも功德を積む事許要なり、人生僅か五十年、七十年は古來稀なり。何はさて唯終の際眞實自己を思むるものは唯生前積める功德あるのみ。妻子珍寶不聞者、くらがりの途をばと行く、好きの聲いの、可愛い懐いの、濟むのすまぬの、馬鹿の違物の、どうの斯うのと云ふ處で、さて唯終の一刹那に有形の何物もが懸懸の材料とはならない、其處へ行くと功德善根は力なり、光明なり。さらば人は何でもセツセと功德を積むこと許要なり、マシヤス先生の所謂た一つの喜び、貴き實例と知らざるべからず、五絶一首を得たり。

吾相親愛運、人事半知煙、  
仰見靈山月、千秋光影圓。

て思はれたのが當方の幸福、何しろ相手は動物の如き、一服敵打の仕草が、田能久をして是は、有難山のほととぎすと北堂笑ましむ。どうです、そんなに其處らに乃公も一つその大蛇に面逢はしたいなあと、妙な夢を見る御連中はいかえ。拙詩偶々成る曰く。

何事世人争名利、  
利名畢竟似塵輕、  
牛背獨坐回思處、  
窓前筆盤分外清。

二〇、臨終の慰安

明治の初年米國から来たマシヤスと云ふ學者、八ヶ月間北海道に居た。最初横濱を立って北海道に行く時、譯者を五十圓買ひ求めた、其時分の事ですから人々は其無謀を笑つた、併し先生は平氣なもので北海道まで夫を擔つて行つて、おし氣もなく學生達に配つた。先生は鎮物學者で、殊に其得意の題目は無機化學でした。南北戦争の時代に少

尉から中尉に昇り、後に大佐マシヤスと呼ばれた。夫よりでなくマクナチウセクト州に農學校を建て、生物植物學者として名聲を得るかと思ふと、今度は亦アマストの市街に水道敷設をする云つた様に千變萬化の英傑で有た。北海道の農學校を辭して米國へ歸つてからの譯書は、船の上に世界大學を作る云ふ事なんだ、教員や生徒を船に載せて、世界各國を廻りながら學問を研究する云ふ計畫なのです。先生は實に野心強々家の代表です、併し晩年は鎮山に失敗して、末路は甚だ非慘で有つたと云ふ話です。處が此先生が愈々死ぬと云ふ間隙に、アマストの或牧師を抜選に呼びました。そうして言ふには自分は此六十年數寄な運命を経て来たが、今考へると唯一つ喜びとするのは、日本の農學校に八ヶ月居て、聖書を讀めた一事而已である。

家庭制度に就て

小林啓善

世界戦争の勢弱強邁の軍隊が多年の國際條約に違反してメソギの永世中立を犯したとき、世界の輿論は條約違反の故を以て猛烈に之を攻撃した。所が獨逸皇帝は平然として「國際條約の如きは畢竟一片の紙切れに過ぎない」と豪語したと云ふ噂が広く一般に傳へられてゐる。それ以來「一片の紙切れ」と云ふ言葉には一種獨特の意味が合着されるに至つたことは諸氏の熟知せらるゝ所である。

所で現在我國に於てやがましく云はれてゐる家族制度も畢竟一片の紙切れに過ぎないと思はれるのである。併し周章てはいけな。我國國體の基礎として一般に崇められてゐる家族制度を——殊更に獨逸皇帝の口吻を真似て——一片の紙切れに過ぎぬと輕蔑したので早呑込みされては困る。全くの所現在我國の家族制度は畢竟一片の紙切れに過ぎない。その然る所以を説明して、將來速かに「一片の紙切」ならざる眞に生きた家族制度の行は

れるやうになるやうに努力したいと考へる。現行法上「家」とは何ぞや、と云ふ問題に答へることは極めて困難である。吾々の常識から云へば、一つの家と云ひ家族と云ふのは結局血族近親相集つて起居を共にし一方に於ては性的及び血族愛の生活を營むと共に、他方共同の經濟生活を行ふものでなければならぬ。然るに今日の法律に於て「家」と云ふのは全くそれとは似ても付かぬ別物である。而も法律家其他多數の人々は其の法律上の「家」に向つて少からざる意義を認め、盲目的に之を擁護することが眞に家族制度を尊重する所以だと考へてゐる。以下二三に就て其滑稽なる結果を觀やう。

今此處に一人の寡兒があつたとする。警察官が拾ひ上げたが結局兩親が分らない。この場合法律上の手續としては次のことが規定されてゐる。

「寡兒ヲ發見シタル者又ハ棄兒發見ノ申告

ヲ受ケタル警察官ハ二十四時間内ニ其旨ヲ市町村長ニ申出ツルコトヲ要ス」  
 「前項ノ申出アリタルトキハ市町村長ハ氏名ヲ命ジ本籍ヲ定メ且附屬品、發見ノ場所年月日時其他ノ状況及ヒ氏名、男女ノ別、出生ノ推定年月日並ニ本籍ヲ調査ニ記載スルコトヲ要ス」(戸籍法第七八條)

此規定の結果として市町村長は業見に命名した上本籍を定めて戸籍に記載する責任があるのであるが、其場合彼は何處の戸籍中に記載を爲すべきであるか？

此場合其の案見は市町村長の定めてくれた本籍地の戸籍簿の中に、他の普通の家族が各家族毎に一枚宛の戸籍用紙に記載されると同様、特に一枚の戸籍用紙を割り當てられて彼一人だけ其中に記載される。さうしてその記載される場所は、吾々が普通の戸籍簿本に於て見るが如き戸籍用紙の右端の戸主の氏名を記載する場所である。かくて彼が唯一一人戸籍用紙の右端に記載されたとき、法律は稱して彼が一家を創立したと云ひ、學者は彼を呼んで單身戸主といふ。而して法律が一般の戸主に向つて與へてゐると同一の取扱ひが彼に向つても與へられることになるのである。勿論

現行民法によると、親から相続した「家」は蓋りにこれを廢し得ざるに反し、新に家を立てたる者は其家を廢して他家に入ることを得るとあるから、業見を養育し其後見人となつてゐる養育院長は適當なる時季に彼の爲に其「家」を廢して他家に養子にやる事が出来るのである。此場合事の事實を如實に觀察するならば、別に「家」が創立されたのでもなく廢止されたのでもない。唯業見に名を付けて戸籍にのせた、そして便宜上一枚の戸籍用紙が割當てられたまでのことである。さうしてやがて孤兒の最も其き處分法として何處かの家に買はれて行つたまでのことである。これを法律的用語を以つて云えば「父母共ニ知レザル子ハ一家ヲ創立ス」とか、一家の戸主たる業見が廢家して他家に入つたとか云ふのである。さうしてとかくこの形式のみを見易い法律家は兎もすれば、用語の問題形式上の便宜問題と實質問題とを混合して、この場合も亦事實の創立あり又廢家ありたるものと考へるのである。

次にかう云ふ場合を想像してみやう。九州の或る山奥の寒村に一農家があつた。長男は先づ傳來の家業を繼承して其まゝ、村に請ひ

まつた。所が次男以下は何れも維新の際志を立て、都に上り、何れもやがて出世して、一人は陸軍大將となり、一人は海軍大將となり他の一人はアラワルに移住して其處に大農園を經營してゐる。これ等四人の兄弟は互に血縁として相當に交り合はれてゐる。しかし居住の遠隔と生活環境の差異とは自ら彼等をして別個の世界に住はしめてゐる。無論家計も全く別になつて居り、子女の教育其他に就ても全然別個の單位をなして生活してゐる。然るに彼等が戸籍を分つて各これを其居住地に移すことを怠り、若くは故郷を思ふの念強くして、長く其戸籍を父祖墳墓の地に殘し置くに於ては、彼等の全然別々なる四家庭も形式上同一の戸籍用紙中に記載されてゐる限り法律上尙一の「家」をなすものとして取扱はれ、アラワル家の子女が結婚するにも一々九州山奥の戸主の同意を要することとなり、又九州の戸主は陸軍大將海軍大將及び其子女全体に對して戸主權の一効果として居所指定の權利を有するに至る。

かくて單なる「戸籍」と云ふ形式が法律上「家族關係」なる實質に影響して、常識上全く許すべからざる結果をも生み出すのである。

一体或る社會に於る家族が如何なる形態をとるかはその社會の經濟狀態其他の實狀が自らこれを定めるのであつて、人為的なる外部的強制によつて無理に一定の形態をとらしめることは出来ない。例へば封建經濟狀態の下に於ける農村山奥の土着家族と、今日社會的事業が發達して總てが貨幣經濟の形式をとるに至つた大都會の家族とが同一の形式をとらねばならぬと考へることは全然誤りである。同様に明治維新以後の武家乃至商工農の家族が或る一定の家族形態をとり、而してそれが社會上一定の働きを爲したことから推論して、直に今日現代の家族も同一の形態をとらざるべからず、又同一の社會的職務を果さざるべからずと主張することは全然誤りである。家族制度が社會上如何なる働きを爲したかは歴史上時代により又は場所によつて著しい差異がある。又家族が如何なる形態を爲したか、戸主が如何なる權利義務を有し、如何なる働きを爲したかすべて時代と場所によつて甚しい差異がある。

此故に徳川時代の武家がとりたる家族形態及び其家族内に於て戸主の占めたる地位と同一のものゝをそのまゝ、今日の家族に向つて望む

ことは全然無謀である。封建經濟の上に於ける農村家族の形態及び社會的職能と同一のものゝをそのまゝ、今日の都會家族に向つて望むことも亦同様亂暴である。産業革命の洗禮を受けた社會は全然それ以前のものゝと區別せねばならぬ。封建社會とそれ以後の社會とも亦全く之を區別せねばならぬ。職業の自由移轉の自由而して又交通機關の顯著なる發達は、從來血族の一大部分を一地に定着せしめて成立したる大家族を各地に分散せしめた。又社會的分業の極端なる發達は漸次に家庭を化して單純なる消費生活の場所たらしめるのである。今日尙家庭に残された多少の生産的働きは僅かに衣服の裁縫と食物の調理とに過ぎない。然るにそれすら今日では(殊に大都會に於ては)漸次に家庭から驅逐せられつゝある。燃料は之を瓦斯會社に依頼し、燈火は之を電燈會社に依頼し飲料水は又之を水道に依頼してゐる家庭は、今や衣服にまでも三超其他の大生産者に依頼し、又既製の食物を他より買入れて飲食する傾向さへもつてゐる。殊に

其傾向は下級家庭に於て程愈々顯著に之を認むることが出来る。而して斯の如き家庭にとつては經濟生活の便宜から集團するの理由が

農村大家族それに比して著しく稀薄となりざるを得ないのは當然である。  
 又封建制度の崩壞後各國に於る「國家の發達、其職能の擴大發展は眞に目醒しきものがある。かくして從來家庭自らのなしたるもの即ち或は自ら開始して外敵を防ぎ、或は戸主に強權を附與して一家の秩序平和を維持したる働きは、今やすべて「有能なる國家の發達」によりて、其軍隊警察の發達によりて、其司法制度の完備によりて、漸次國家の手に奪ひ移されつゝある。

而して一方大工場制の發達と同時にすべての生活必需品が貨幣を通じてのみ手得し得べきこととなつた。現代經濟生活の下に於ける貨幣階級の知きは、單に僅かなる貨銀の獲得の爲に夫婦共に家庭を見棄て、異別の工場に働かればならぬ境遇にまで陥りつゝある。かくして彼等の家庭は僅かに夜間の賃しき安息を求めただけの場所となり、子女の養育の知き到處自ら之を顧みざる暇なき有様となりつゝある。茲に於て國家其他の公共團體は或は託兒所を設けて幼兒を養育し、或は教育制度感化制度を設けて子女の教化感化に任じ、又或は場合によりては不真なる父母の手から親

權を奪つて國家の手に收める制度さへ設けらるゝに至つた。

尙又國家は失業保險、強制的健康保險の制度を設けることに依つて、從來家族相互の互助によつて救ひ來りたる失業、老廢、疾病其他個人的困難を國家的に、即ち國民全体の相互的保險によつて救済することを冀するに至りつゝある。要するに社會經濟の變革と、國家の發達とは互に原因をなしつゝ、吾々の家族生活までも漸次大變遷の渦中に捲き込みつゝある。

かくして社會上の「家」は變化しつゝある。而して昨の家にありたるものゝすべてを今日の「家」に就ても亦同様に要求せんとする人々は、この社會上の家の變化を目して「家族制度の崩壊」なりとし人心の廢頹なりとするのである。

けれども私は考へる。今日と雖ども今日の「家」として今日相應の職能をつとめつゝある。而して國家の職能が如何に發達しやうとも家庭の働きを全然この社會から驅逐するとは永久に出来ない。國家に適する仕事は總て國家に移す可とすべきも、家庭は又家庭としての獨自なる適任の仕事をもたればならぬ。

ぬ。けれども其仕事の内容及び範圍は自ら社會と共に變化せねばならぬ。今日故郷を離れて大都會に居住しつゝある無數の家族の如き、すべてその傳統的なる所謂「家族制度」乃至は法律上の家、其他「戸籍」の關係とは全然別問題に、各々それに獨自なる生活形態を保有してそれ相當に社會的職能を果しつゝある。成程家庭の包容する人々との範圍、彼等相互の間に於て與へられつゝある共助の内容は、嘗て「大家族制度」の行はれたる時代「國家」の發達せざりし時代のものは是れと異ならう。けれどもそれは決して家族制度の崩壊でもなければ、人心の廢頹でもない。畢竟家庭生活の社會に適應して變化しつゝある自然の現象に過ぎない。

昨にありたるものゝすべてを今日に就ても亦同様に望むが如きは抑も無理である。而もその無理の通りぬることによつて受けた煩悶がやがて新しきもの、總てに對する呪ひとなる。さうして「家庭制度の崩壊」と「人心の廢頹」とを嘆き、其罪の總てを「新しき思想」に歸しやうとする。けれども斯の如き態度はすべて唯自己の無理解を表白することに役立つに過ぎない。

今日我民法の「家」に關する制度は祖先祭祀の繼續、戸主權による家族生活の統制、及び同一の家に屬するものは總て必ず同一戸籍に記載することの三者を目標として規定されてゐる。

私は祖先祭祀が今日我國社會に於て最も重要な意義を有することを勿論否定するものでない。けれども祭祀の問題は寧ろ宗教の道徳に専ら委ねらるべき問題で法律を以て強制すべき事柄でないと思ふ。殊に單に祖先の祭祀を絶つべからざるの一理由によつて法律上極力「家」を繼續せしむべき方を考へ、例へば戸主死して之に法定の相續人なく又兄弟姉妹乃至配偶者の類なき場合に於て、廣く一般親族の間より、否更に進みては亦の他人を相續人に選定してまでも「家」を繼承せしめんとしてゐる規定(第百八十五條)がそれである。如き我々の到底その可なる所以を發見するところが出来ないのである。かくの如き場合、若しも死者に多少の遺産があれば人々は争つて相續人を選定するに違ひない。けれども何等の遺産もなく従つて相續人を選定するも財産に何等の利する所なきに於ては親族あるも尙選定を怠るのが現在我國社會の實狀である。

彼等の多數は形式上先祖の位牌を云々しつゝ、實は遺産にのみ眼をつけてゐるのである。斯の如きは祖先祭祀のことが寧ろ宗教道徳の問題であつて法律上の問題に非ざることを忘れ、唯形式的に法律上の「家」を斷絶させさへしなければ、祖先の祭祀も亦自ら繼續されるものと考へる甚だしき謬想の致す所である。この外祖先祭祀の繼續即ち家の繼續なる事柄を法律的且形式的に考へる結果幾多の不當なる結果を生じしめてゐることは民法中隨所に之を發見することが出来る。

次に又今後世の中が如何に變化し國家の職能が如何に擴大しやうとも家庭が家庭として獨自の社會的職能を長く保持すべきことは亦之を疑はない。けれども其職能の範圍及び内容は社會と共に變化すべきであり、従つて家族組織の形態殊に戸主權の内容の如きも社會事情と共に變化すべきである。昔の大家族が多數の血族近親を包容したるの故を以つて今日今後の家族も亦同一同様ならざるべからずと論じ、昔の戸主が家族に對して絶大の權力を有したることを理由として、今日今後の戸主も亦同一ならざるべからずと論ずるが如きは愚の骨頂である。

更に又戸籍の問題に至つては、全然國民登録の技術的事項に過ぎない。今日の如く一家一戸籍とするの主義を便宜とすべきか又は國民全部をイロハ別として索引を作るこの方が便宜であるかは單に技術の問題である。今日の戸籍制度は單に國民全部の登録であり索引である。所謂本籍地は事實上或る家族の所在する場所とは全然無關係であつても、單に家族の戸籍が日本中何處の戸籍簿中に繰込まれてゐるかの問題に過ぎない。例へば私は小笠原島に原籍のある者と假定する。しかし小供の時から東京に育つて未だ一度も故郷の土を踏んだことがない、それにかゝわらず私の家の戸籍は今尙依然として小笠原島の某村落に在るものと假定した。これは會々私の戸籍が同地の戸籍簿に繰込まれてゐるだけのこと

で、假りに之を京都市に移さうと大阪市に移さうと、私が小笠原島出身者たること及び私の家族が現に東京に在ることには少しも増減する所がないのであつて、それは單に或るカードが第一の箇から移されて第二の箇に入れられたのと同一の意義を有するに過ぎない。かくの如く戸籍は單なる國民登録の技術的事項に過ぎざるに拘らず、現行法が會々一家は

必ず之を一戸籍中に記載するを便宜として技術上其主義を採りたることは、頗つて苟も一戸籍中に記載されてゐる以上は、實際上日々生活を全然別々にしてゐる者でもすべて必然に一家族であり、之と反對に記載されてゐない以上社會上如何に家庭生活を共にして居らうとも必ず異別の「家」に屬するものとする思想を生むに至り、形式は遂に事實上まで影響して極めて奇怪なる結果を生じしめてゐる場合が少なくない。それが爲今日我民法上「家」とは何ぞやと問ふものがあれば「同一ノ戸籍中に記載セラシメタルモノ、總テチ云フ」と答へることが最も正確だと云ふ極めて不思議な結果を生み出してゐる。

私はこゝに於て祖先祭祀の爲にする「家」の問題及び家族制度の實質問題を深く論究しやうとは考へない。けれ共今日法律上所謂「家」なるものが上記の意味に於て實に「一片の紙切れ」となつてゐる事實を眞の耳に入るれば足る。而して單なる形式の問題、技術の問題が實質の問題生活の問題にまでも窮屈な拘束を與へてゐると云ふ事實に就て諸氏の注意を喚起したい。さうして今後我國の家族制度

# 不明庵涓滴

古田昂生

## 不明庵

山村に隠棲するのも六づかしいことだが、市隠となるのも可なり困難なことだ。自分は嘗てごに自分が住宅を控えてゐるかを他人に明したことがない。限られた一部分の人だけが自分の茅屋を知つてゐるだけである。

自分は他人からいつも自分の私宅を聞かれる。その度に「不明庵サ」と答へる、訊ねた人はいつも啞然としてゐる。

自分は公用以外絶対孤獨でゐたい。そして自由で居たい。

他人の爲に可なり徒らな時間を空費させ、可なり無駄な金を使はせられ、且つ不快な時が尠くない。徳慶、下らないことが社交だとすれば、私は社交

なり、第三者にならんとする。

權勢者を憎み、道徳家を蔑視する一種の新聞記者特有の偏狹的意識がいつの間にか自分の心の中に浸潤してゐる。そしてそれが往々に發揮されるには自分ながら怖れる。

一時の興味で筆を走らせることが、往々にして大きな波紋を描き、且つ人々を社會から葬つて了ふことがある。それは單なる興味からの結果とすれば餘りに怖ろしいことではないか。

「冷靜」はわれらの金言である。が、この「冷靜」は一度筆を持ち始めるといつの間にか消失して、生れいづるものは情熱であり、興奮である。

情熱、興奮がある程度まで新聞記者の仕事を完成せしめることを思へば、自分は迷はざるを得ない。

## 有階級

生活の安定を得てのらくらしてゐる者を有階級

を輕蔑する。

從令、茅屋でも、そこに満足し自由な氣持で寐をべり、讀書してゐる時こそ、自分は徳慶愉快な時はないと思つて居る。

その意味で不明庵は我が樂土である。

自分はこの頃、この不明庵と、自分をもつとよくなる爲に、こゝで聖日蓮の御遺文を讀んだり、江戸期に於ける風俗史を讀んだりしてゐる。ほんとに氣持である。

## 新聞記者

自分の職業は新聞記者である。すいぶん意義があり、愉快な仕事である。が、この頃、此新聞記者なる職業に可なりメランコリツクを感ずることが多い。

問題は自分の修養一つであるが、要するに自分は人間である。「絶對的に第三者に在りたい」といふ意識は常に持つてゐる。が然しやゝもすると第二者に

といふ。この世の中に「有階級」はど邪魔なものはない。

有階級者の考へることにいふ事は一つもない。劇場、活動寫眞、演藝、娛樂總てはこの有階級が占領し横行してゐる。

世の總ての民衆娛樂といへるものの中、ほんとうに民衆が娛樂として享樂し得るものゝ幾何かといひたい。

世の犯罪の多くは有階級から胚胎してゐること

も亦見逃す事が出来ないことである。國家を緊張せしめ、國力を振興せんとする有志は須らく有階級を撲滅するの策を先づとらねばなるまい。

## 階級闘争

人間が人間を區別し、そして區別に依つて憎み合ふ。こんな馬鹿氣た、下らないことが他にあらうか。華族は平民を蔑視し、平民は華族を擲擧してゐる、



世相は、人間に階級的差別撤廢の必要を示したものであるまいか。

華族の息子が藝妓と心中すると世を擧げて問題とし、是れを喧嘩する。一大工の心中は敢て顧みる人もない。

その所爲は一であり、只身分に於て華族と一平民であるが故に問題の大小を割するものであらう。

然らば華族にして一平民と同一な所業に及ぶものを何人が撰み、区分したのであらうか。

上流階級よく下層階級と所爲に於て共通してゐる今日、その階級的差別が依然として設けられるは下らなきツネテムに非らずやと云ひたい。

### 道德の推移

人間がゆるかせにする可らざる道德すらも、時代推移と共に推移する。

これは「道德」が漸次合理的になつてゆきつゝあ

見ると全く犬死になどいつて洒落れてゐる場合ではない。

明治維新の際の如き勝てば官軍、負ければ賊など好例ではないか。

勢く其、今日の小學教育は法は嚴然として曲ぐる可からず、犯すべからず、變ゆるべからず式に教へられた。その法律すらも時に書き換えられんとして

(四三頁より續く)

が實質上に於ても本眞に社會に適合し且社會上其妥當なる職能を發揮し得べきものたらしむべく研究を進めたいと思ふ。

今日盲目的なる保守主義者は全く以上の事實を悟らずして唯従前に傳統的なる家族制度の形式を、法律上の力に依つてまでも長く今後に永續せしめやうと考へてゐる。けれどもかくの如きは「家」をして反つて實質的にまども「一片の紙切れ」たらしめ、又世人をして反つて家族制度を輕蔑し厄介視せしむる所以であつて、家族生活が社會上必然に有すべき或意味と、職能とまでも否認せしむるに至る所以である。

る現象である。

「上官の命令は事の如何を問はず服従すべし」の大綱領すら書き換えられんとしてゐる。

忠君の義こそ確立して不拔なものではあるが、父子、兄弟、夫婦、主従に介在する道德すら當に混沌低迷してゐる。

主従三世の觀念も「主主たらすんば、臣、臣たらす」式に變じてゐるなどは、その極端な例である。

殊に市井上の道德に至りては、その差、その異、その變、全く驚異の眼を古老が見張つてゐるのも宜なる哉である。

法律又然りである。

法は是れ道なりで、道德を根本にして生れ出たるものなるが故に、時の道德觀念如何に依つて法律も差異がある。

極端なる例ではあるが、徳川綱吉の犬禁分に觸れて殺傷されたもの三百餘人、之れ等は今から考へて

ある。然し、如何に道德、法律に推移あらうとも、只だ、永久不變なる大道は一脈坦々として存続してゐる。

人間がこの大道を見失つた程危険なことはない。が、悲しい哉、現代の人々がこの大道を漠然としか記憶してゐないことである。

本多日生師著

### 綜合的佛敎觀

定價 一部金一圓五十錢  
送料 金 十八錢

發行所

名古屋市東區田代町

統一編輯局

振替名古屋一〇八一九

本多日生師著

### 法華經自我偈講義

定價 一部金二十錢送料金二錢  
十部特價金一圓(送料共)

各地教信

▲本山布教報告(五月中) △一日午後

一時開講會並に本山婦人會例會開催「法華有縁の女人」原田部長△二日午後七時半開正會主催講演會講演「佛教の大綱」原田日勇師△八日午後二時於成就時變正婦人會講題「大原の社會施設に就て」有田布教師△八日午後七時半於本正寺二樂會例會講題「感謝の生活」吉塚布教師「引寮口唱の成佛」萩原信正△八日午後八時於待賢小學校同校内青年會總會に出張講演來會者百五十名餘講題「犧牲的精神」原田部長△九日午後二時於正行院正行婦人會開催講題「題目の意義」原田部長△九日午後七時半於本山講堂統一團青年會開催會員四村銀次郎氏演說談話討論題「何故に國家が大切なるや」了て茶話會を開催來會者三十餘名△十日午後一時於上陸下飯塔御免殿講大法要兼修進に大講演會開催一日蓮主義より見た

行同上醫學士△二十二日立正結社談話會、秋元鈔の「節」上田師△二十五日讚舞會「日蓮聖人の宗旨」和井田氏「法華取要鈔大要」上田師何れも盛會。

▲京都府木津教報 △五月十一日銀婚式奉祝會修行「國王の恩につきて」藤啓純師△十二日宗祖會修行「在家出家の意義」藤師△廿七日婦人會例會「婦徳を養へ」藤師。

▲千葉東金教信(本漸寺) △六月廿一日立正結社分會第二回總會を開き午後一時より會員祖先法要を營み直に講演があつた後同三時から開遊會に入り頗る盛會であつた。

▲和氣布教報(五月) 岡山縣赤磐郡周臣村大字草生久成寺住職田中通正は五月十五日夜和氣郡和氣町本成寺へ顯本婦人會に例會に至り講演した△尙田中師は顯聖十六日は午後七時から同町同信會の例會で「人生の五欲」と題して講演し更に翌十七日は同寺橋子供會で一場の法話を試みた。

▲和氣文化講演會 岡山縣和氣町本成寺立正會の主催として六月十四日午後七時より同町俱樂部に於て第二回文化講演會を開催し講師に能仁一師外二名にて橋本常昭師

る大天皇國」野口權大僧正△十三日午後三時開光婦人會總會開催録興として顯本健見會處女の守歌、新巻、讚佛歌、等の唱歌(舞)

染田菊子(三味線、老松)西村房子(狂言)口真似、不問座等あり庭園に於て模擬店を設置、遊藝の無窮を慶讃奉祝せり來會者百名也△十三日午後一時宗祖會並に婦人會開催「善隨行」有田布教師△十五日午後七時半林氏宅にて家庭講演「家庭の安定」原田部長△十六日午後三時於法光院法光婦人會開催「宿願深厚」原田部長△十六日午後七時半於妙泉寺立正統一會主催講演「宗教生活」土持良達師△十八日午後七時半於本山講堂例會開催「平和の基礎」原田部長同土持良達師△廿八日午後二時於本山山陰地方震火災犠死者追悼法要兼修來會者百數十名右了て講演「第二回修來」原田部長△毎日禮日午前九時より午前中顯本健

「開會の辭」を述べ次て金事師は「讀佛性の生活」と題し熱心に説き能仁は師「健全なる宗教心の發揮」と題し饒々萬言に及び二時間に亘る長講演を爲し近來になき多大の感動を興へ午後十一時半盛會裡に散會した。

日本海軍 二十周年 紀念講演會 五月廿八日の日本海軍大戦二十周年記念日を卜して午後六時から丸之内報知講堂で清明會新民主義となり記念大講演を開き右馬海軍大將の「勳語奉讀」に契つて推新史料編纂官時田孫彌氏の「帝國海軍と海舟先生」の講演を始めとし佐藤鐵太郎中將の「日本海軍大戦の追憶」高橋是清男の「日露戦役に關する外傳談」などの講演あり、聽衆堂に溢れ頗る盛會であつた。

富山の日蓮中隊 營舎内に聖像安置 富山縣第十一中隊長新能久造大尉は熱烈な日蓮主義で日蓮主義こそ帝國軍人精神教育に最も適したるものとなし今校同中隊營舎内に佛壇を設け大日蓮を安置し時々兵士を集めて

見會を開催來會者七八十名なりき講師、有田、土持、豊田、中島、中村、山田篤、龜井、各師熱心に歴史談、修養談、お伽談を開かせ毎時盛會なりき。

▲大阪教報 △四月十五日大抵俱樂部にて「佛法興隆と五大理由」本多日生現下△十九日堂開寺にて觀經講演會△二十五日讚舞會「日蓮聖人の宗旨」和井田寬舟氏、如說修行抄大要「京藤義應師△二十六日日本村宅にて、人生の大事」京藤師△二十八日開宗紀念講演「四個格言に就て」赤口富雄氏「我祖の立教開宗に就て」和井田寬舟氏「一念三千に就て」京藤義應師「立教開宗と我徒の覺悟」上田智量師何れも盛會△觀經會席上にて、「花盛る妙の御庭につどひ來て結びかたむる法の友垣」(和井田)「つどひ來て結びかたむる友垣を驚の御山のしるしとぞせん(六則武)」

△五月十日蓮成寺にて讚舞會「如說修行抄大要」京藤師「法華取要鈔大要」上田師△十二日堂開寺にて「我國體と日蓮聖人」京藤師「久遠の生命」上田師△十六日學生日蓮讚舞會開會の辭「伴錦次氏「日蓮聖人を慕ひて」光岡徹氏「共業所感」能仁國三郎氏「日蓮聖人の跡をたどりて」志智左右六氏「顯本遺毒の信

日蓮主義を説き内部精神の感歌に訴へ頗る効果を擧げてゐると。

札幌顯本寺の 開堂入佛供養 大正十四年五月二十日北海道札幌市白石町に新創された顯成山顯本寺は、いよいよ本堂新築の工成り、管長大多日生現下、及び同友日城曾正、兒玉登田兩師等を迎へて、盛大なる開堂入佛供養の式典を擧げた。

式は午前十時から初まつたが、僻北の地には珍らしい天童音楽大法要で、遠近から隨喜參集した、千幾百の信者達は、大導師現下の慶讚文に顯本寺創立者の殉教的苦闘が大本尊に言上されるのを聞いて居て、感激して皆な泣いた。法要後不多現下の法話があり。同夜講演會「本佛に渴仰せよ」岡友信正。佛教信仰の歸結」本多現下。

翌三十一日午前十一時、苗穂鐵工場に於て職工の爲に本多現下の講演「三つの自覺」あり、同夜時計臺公會堂に於て講演會「復り來りて」兒玉常宣師、人間性に徹見せよ」岡友

式佛入堂開寺本顯幌札



文學士。「國と人と教」本多親下。

翌二十日江別法華寺に於て宗前上人六百

紹介

岩野直英氏著の

「佛教を決定する二大説法を讀む」

末見の知己岩野直英君、信本するの餘り一書を編纂し世に與ふ。名付けて「佛教を決定する二大説法」と爲す。

而して編輯局にその一部を送りて、同人の所感を問ふ即ち拜讀してこの一文を享す。

これより先、管長本多日生親下、同書を推賞激讃し、一讀の要を薦むるの書翰を賜ひ、併せて、同書附録に收むる處の所見に對して本多親下が嘗て、大阪に於ける講習會の際「本尊論」の講述を爲せしが、該本尊論は日蓮教學の混亂を掃除する本多親下決心の講述にして、本多親下がこの本尊論に於て提唱する處と岩野君所感の内意と共に一にして何等の矛盾無きを知つて欣快に堪へずと親下が書翰の

五十遠忌大法要が盛大に嚴修され、本多親下國友見玉師の講演があつた。

末尾に附記す。

依つて、予、岩野君の此著を贈らるゝや、期して拜讀せり。

宜なる哉、本多親下の言、善い哉著者の、の善行。

本書に收むるは、妙法蓮華經の方便品、如來壽量品の二大説法を簡易直截に邦文に翻譯したるものにして實に初學者に便有るのみならず、その淵々たる調、詠々なる韻の裡に、佛の甚深無量、最勝最妙なる美と愛と眞と清とを目撃の中に湧然とわか心に生かしむ。今更に佛の智慧慈愛の廣大を感謝するの念生すると同時に、この書を善く世人に薦むるの責を感ず。

附録の著者の所見は、二部に別ち第一は「佛教修習に就いて」と題し、第二は「如來不滅の教誨に就いて」を述ぶ。共に十項目を掲げ佛教修習に就いては

「之を要するに如來の在世ならば、親近し滅後ならば信仰せよ、然らば我等は徳を積み心を清くし必ず佛となることを得べし、是れ此の説法に於て決定せる佛教最高の教義なり」

と、方便品の妙諦を説き、

如來不滅の教誨に就いては、壽量品の訣要を教示す。即ち

「佛題目を説ふことは手段なり、此の手段に依りて釋尊を懇慕渴仰し、淨く懐しき心となり、教を服膺して惡を去り善を行ひ積功累徳せば遂に佛を得べけん」と結べり。

嗚呼、この書の小冊にして、よくこの甚深無量の佛意を智し果せる。誠に岩野君の積功われら感謝する餘りあり。

予、之れ以上贅言せず、宜しく、本書一部を得て佛教を決定する二大説法を知れ。敢えて諸君に予の讀後感を語り、本書を薦むる所以。

(一記者)

社寺建築及臺灣檜材の安價提供  
設計監督

當所は社寺建築改善の目的を以て臺灣總督府及内務、文部兩省の了解の下に臺灣檜材の安價提供及工事の設計又は監督の御依頼に應じ可申候間工事の大小に拘らず左記御便宜の個所へ御相談被下度候  
追て設計規程並に目安表又は臺灣檜木質見本等御入用の向は御申越次第呈上仕候

東京市麹町區有樂町三丁目二番地

社 寺 工 務 所

(電話銀座四〇八八番)

神奈川縣 鶴見町

社 寺 工 務 所 鶴見支所

福岡市外堅箱町馬出松原

社 寺 工 務 所 福岡支所

(電話二二三〇番)

大阪市西區市岡町七十九番地

社 寺 工 務 所 大阪支所

(電話西三二二四番)

臺灣檜材の特長  
一、耐久防腐  
二、蟻害絶無  
三、香氣清楚  
四、木質堅緻  
五、木理整然  
六、木色高雅

價 定 一 統		
一	半	一
ヶ	ヶ	冊
年	年	金
金	金	貳拾錢
貳	壹	貳拾錢
圓	圓	送料共
貳	圓	送料共
拾	圓	事之金前
錢	圓	

料 告 廣 一 統		
一	半	一
頁	頁	頁
金	金	金
貳	拾	貳
拾	五	拾
圓	圓	圓
五	九	圓
圓	圓	事之金前

大正十四年 六月十七日印刷  
大正十四年 七月一日發行  
本(第三百六十四號)

不 許 複 製

編輯兼 國友日斌  
印刷人 鈴木日雄  
印刷所 名古屋千種町字五反田五二番地 三益社  
東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地

發行所 統一發行所  
名古屋市東區田代町字城山七十七番地  
振替東京五一〇七一番

編輯局  
局長 東五四八七番  
振替名古屋一〇八一九番

目 次

教義信條の整束……………本多日生  
佛教徒の覺醒すべき二方面……………井村日成  
佛教の卓越せる所以……………本多日生  
獸類大會……………中村にしき  
記事報導……………

第廿九年八月號

